
LEXRAD

磯ヶ谷 拓斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEXRAD

【Nコード】

N2226S

【作者名】

磯ヶ谷 拓斗

【あらすじ】

山代ギンは高校生。ある日の帰り道、彼女は黒い一匹の犬に襲われて、死にかけながらも“力”を手に入れる。それが全ての始まり。『ウィルキスクリスタル事件』の始まりだった。

中学一年生の時に書いた作品です。

前口上（前書き）

この部は物語とは関係のない空間です。
物語だけ読めればよいという方は飛ばしてください。かまいません。

前口上

皆さん、始めまして。磯ヶ谷 拓斗です。

現在高校生ですが、この物語、LEXRADは中学校1年生の時に書いた物です。なんと4〜5年ほど昔の作品なんですよねー。なんという黒歴史……。

当時はまだ大人的な物には疎く、えつちな話は苦手でした。今から考えると純粹だったといえるでしょう。今は純粹じゃないんですけどねっ！！ 言わせないでくださいよ、こんな事。

あー、まあ、それはともかく。

この作品は中学生の時に書いた物です。なのですごく読みにくかったり、話し飛んだり、漢字間違っていたりしますが、スルーでお願いします。私は傷を広げたくない。

でも、なぜこんな黒歴史をここに来てここに出したのかというところ……うーん、コレはあとがきの方で発表したいと思います。大して意味は無いですけど。

それに、ここまで言っちゃえばなんとなく何がしたいのかバレてる気がします。皆さん鋭いですし……。

とりあえず、前口上はこんな物で終わりです。

……書く内容なんてなかった……

第一話 解放

「ハアハアハアハア・・・」

私は暗い夜道を走っていた。学校の帰り道・・・安全な道のはずだった。はずだったのに・・・

「なんなの！？あの怪物は・・・！？」

私の右腕は完全に再起不能状態だ。先ほどからのすごく痛むしもう腕を上げる力もない。それに大量の血が流れていた。

突然私の目の前を黒い影が遮った。早すぎた。私の目の前にはもうすでに怪物がいたのだった。

——死ぬの・・・かな・・・？

それを最後に体に痛みが走った。それと同時に意識も薄れ始めた・・・。

それは私が高校生になって早めに学校に来たときのことだった。

私は一緒の高校に入った友達たちと教室に入る。運よくみんな同じクラスになれたのだった。

「また一緒のクラスだね。」

「うんうん。これからよろしくね。」

「・・・うん・・・。」

左の子が飯沼いいぬま 沙羅ちゃんさろ。勉強は苦手らしいけれどもスポーツ万能な元気な子。

右の子が岡部おかへ 小百合ちゃんさゆり。ほとんど会話をしない子で、勉強の成績は学年トップ3。

中央の子が私、山城 ギン（やましろ ぎん）。男っばい名前だ

って言われているけれども、特に気にしてはいない。だが、昔はいろいろとやんちゃをやっていた。

それは真面目に悩める悩みだ。

「ん？」

教室に入って辺りを見回して始めて気がついたがまだ生徒が一人しか来ていなかった。

その一人は男子生徒のようで・・・てか男子生徒。眼鏡をかけていて幾分か短い黒髪。何というか普通の生徒だった。

気が弱そうな雰囲気で本を読んでいて、題名は・・・「クリスタル」？私は彼のほうに近づいていった。

「えーっと・・・みんな遅いですね・・・」

「うん・・・。まだ時間３０分ほどあるからね。」

彼は時計を指差しながらこちらを見ずに答えた。数分ほどその状態が維持され、私が後ろを向いたとき彼に言われた。

「夜道は危ないです。気をつけたほうが良いですよ・・・。怪物に食われたくなかったらね・・・。」

私はビクッと反応して彼のほうに向きなおした。彼はこちらを見て少し首を曲げながらにつこりと微笑んでいた。

「え・・・それいったいどういう・・・」

「ギン~~~~~暇だからトランプしない~~~~？」

私は返事をした後に友達のほうへと駆けて行った。その後姿を彼は見つめていた。彼は最後に一言

「そう・・・もう誰も死なせたりはしない・・・一般人もね・・・。」

~~~~~  
そういうと目線を本に戻してまた黙ってしまった。

「彼は・・・？」

私は沙羅ちゃんに彼のことを聞いてみた。意外な顔をして沙羅ちゃんと言った。

「へえ~~~~ギンってああいうのが好みなんだ・・・。」

「ち・・・ちがうよ！！・・・何か変な感じがただけ・・・。」  
「まってね。あいつらに調べてもらうから。」

沙羅ちゃんはい赤い携帯を取り出してどこかに電話をかける。  
とりあえず沙羅は彼の情報をいろいろと教えてくれた。沙羅はその美しい容姿で情報部の実権を握った恐ろしい友なのだ。

彼の情報を整理してみよう。

名前 高野<sup>たかの</sup> 宗次<sup>そうじ</sup>。中学までの経歴は完全に不明。家族関係は母、父、兄の4人のようだ。

中学もどこに入っていたかは分からない。なんでも完全に消滅していたらしい。それともうひとつ。

彼は私たちよりも一つ年上・・・珍しく中学がダブっているらしかった。何でもタバコを持っていたのが見つかったとか・・・。  
最後に沙羅ちゃんは、彼にはあまり近づかないほうが良いかもしれない・・・と付け加えた。

それを教えてもらったのはこの日の昼放課だった。それまでは私は普通に授業を受けている。シャーペンで指で回しながら私は彼のことを考えていた。

別に好きとかそういう意味ではない。ただ・・・彼の持っている『何か』に私は引かれた。何だったのかはよく分からない。

私は、彼に何かを感じた。それは何だったのかはよく分からないが、今考えてみればそれは、事が起きる前の前兆だったこと・・・それに気づかなかった私は今も後悔している。

私は昼放課の後に一人屋上にいることにした。午後の授業をサボったのだ。基本私はそっちの系統なので罪悪感とかそんなものは存在しない。

考えることがある。それは高野のことだった。何べんもいうようだが好きではない。私が一目ぼれなどあるわけがないのだ。

まあ・・・少しは悪くはないと思うけれども外見的には・・・

でも少し外角に外れた。つて・・・

「わたしは何を考えているんだ!？」

その時私は自分の中学時代のことを思い出していた・・・。

私は普通に授業を受けるタイプではなかった。どちらかと言えばサボる傾向が強かった。それに喧嘩などもやったので不良と呼ばれても仕方がいぐらいひどいありさまだった。

私が学校に行ってもみんなすぐに私を避けていった。まあ、当たり前のことなんだろうけれどもさ。

授業の時間はいつも外を見ている。毎日が暇でたまらなかった。だから喧嘩をするのだ。私はいつも生傷が絶えなかった。

それを変えてくれたのがあの二人・・・

その日私はむしゃくしゃしていた。それは学校で先生に叱られた事だ。こつちが逆切れしてさっさと切り上げてきた。

「ちつ。久しぶりに学校に行ってみればそういう扱いかよ!!！」

基本的に自分が悪いのにやつ当たりだった。中学のときの私は自己中心だったのだ。世界は自分を中心に回っていると思いがちな・・・そんな自分だった。

ぶらぶら歩いていると公園に入ってしまった。気づけばもう夜・・・誰もいなかった。

私は不意に下に落ちてた空き缶を蹴り飛ばした。カッンという空っぽな音がした。だが・・・こういうときに限って・・・

ドガア

「ぐええ!!！」

目の前に人がいた。それも集団で。私は急いで走り出して、『ごめんなさい』と謝った。そういう所は叔母から徹底的に教えこまれた。だが・・・こういうやつ大抵おんなじことを言う。

「おうおう!!姉ちゃん!!頭蓋骨が陥没しちゃったじゃねえか! ?ああ!？」

見た目で不良だといわんばかりだった。予想通りの反応だったし。

当たった男は黒髪のアフロ。片手には木刀だった。後ろの人たちを見る数は7人・・・全員で8人だった。みんな片手には鉄バットやらナイフやらと危ないものばかり持っていた。

「ん！？姉ちゃんよく見たらかわいいかおしてるなあ・・・？」

アフロの不良は私の顔に触れてきた。確かに噂ではそうだった。私は知る由もなかったが自分のクラスではトップ3に入るほどだった。ただ性格が問題なだけだった。

アフロの男はニヤニヤと笑っている。こういうときは大概『体で払え』とか言うんだ。そういうやつはよく見る。

私はハアーっとため息をつきながら目をつぶる。そして目を開く。私はそうするとスイッチが入る。入ると目つきがものすごく悪くなるのは気にしない。

いきなりの反応に驚いたアフロはかなりの隙があった。

私はとりあえずアフロの横腹を右手で一発入れてやった。「ぐええ！！」と缶の当たったときと同じ声を出しながらその場に倒れて行った。それを見た他のやつらは呆然としていた。

私は気絶しているアフロを見下すように見て一言

「さわんなよ！！クソボケが！！！」

すぐに思考が戻ったやつから攻撃を仕掛けてきた。最初のやつは普通にこぶしで勝負を仕掛けてきた。

右腕を引いてまっすぐ伸ばす。いい右腕のストレートだった。だが私はそれを懷に潜り込みながら避け、アッパーを決めてやった。相手は少しの間空中を浮遊していた。その間に次の奴がやってきた。片手にはナイフが握られていた。

最初の奴と同じように右腕を伸ばしてきたがそれをターンして避けて、そのまま裏拳を叩き込んだ。教科書どおりだった。

二人目が倒れるのと一人目が倒れるのは同時だった。一人目の奴が長い間空中浮遊してたのだ。

三人目はバットを握っていて、突っ込みながら横薙ぎにしてきた。私はしゃがんでそれを回避して、お腹に一発思いつき叩き込む。

それだけで相手は倒れこんだ。

「疾風の雷撃か・・・」

敵の一人がぼさつとつぶやいた。それを聞いたとき私は正直に驚いた。その名は私の喧嘩時の二つ名だった。

その時一瞬だけ判断が鈍った。真横から接近してくる一人に気づけなかった。気づいたときにはすぐ横にいて思いつき顔にもらってしまった。

相当強くて私は少し吹き飛んだ。その先には空き缶入れがあつて、激突・・・痛かった。

「うつつ・・・」

当たり所が悪かった。私はその場に座り込んでしまった。そこに四人に囲まれてしまう。

4人の中の一人が片手に持っていた鉄バットを振り上げた。その男は笑っていて・・・そのとき私は始めて『恐怖』を感じた。

そしてそいつはバットで殴ってきた。ドグアつとバットが頭に直撃した。

「ぐわあ!!」

頭にものすごい激痛が走る。私は首から前のめりになった。頭からたれてきたと思われる血のせいで右目の見える範囲が真っ赤に染まっていた。それに意識がだんだん遠のいてくるのも分かった。

鉄バットを使った男はまたバットを振り上げた。私は目を強くつぶった。悔しかった。その時

「やめなさい!!!」

それは女の人の声だった。たぶん若い人だろうと思った。だが・・・その人物を見ようとしても目の前が赤に染まっているしぼやけてよく見えなかった。

「何だよ!? 姉ちゃん!?」

「その制服・・・この女と同じ高校の奴か・・・!?」

それだけはハッキリと聞こえた。そこで私の意識は完全に真っ黒に消えてしまった。

「・・・ギン・・・？」

不意に私は声をかけられた。場所は学校の屋上……。話しかけてきたのは小百合ちゃんだった。

「ああ・・・小百合ちゃんか・・・。どうしたの・・・？」

「・・・午後の授業・・・いなかった・・・。」

「あゝサボったのよ。」

「・・・サボるの・・・久々・・・。」

確かにそうだった。私は二人に出会ってからほとんどサボらなくなった。喧嘩もやめた。噂も少しづつ薄れていった。

「でも、どうしたの？こんなところに・・・？」

「・・・もう・・・夕暮れ・・・。」

そう言つて小百合ちゃんは夕日を指差した。それを見て私はまた語りだした。

「君たちとの出会いは・・・あの日だった・・・。」

頭を殴られた私は生死の間をさまよった。周りは紫や黒などの黒い色で覆われていた。360°全部・・・。

急に目の前に少女が現れた。髪は赤色で腰の辺りまで伸びていた。服は白っぽい服でワンピースだ。そして一言、

——あなたは私と共に生きるために生まれた——だからここで死んではいけません——

それは意味がまったく分からなかった。もちろん見たことがあるわけない。そして女の人は光に包まれて消えた。そのまぶしさのあまり私は目を閉じた。

私が目を開けた時、見慣れない天井がそこにはあった。

元は白だったのだろうが夕日のためにオレンジ色に染まっていた。  
「・・・起きた・・・？」

私は右を向いた。そこには一人の少女が立っていた。目は少し伏

目がちで弱気な感じがした。

「あんたは・・・？」

「・・・私は・・・小百合・・・。」

彼女は名前しか答えなかった。苗字は答えなかった。それで私はまた上を向いた。

このツーンとくる匂いは薬品の匂いだった。ここは病院なのだ。それはすぐ分かった。だが少女のほうはぜんぜん分からなかった。黒髪で少し長めできちんと整えられたその髪・・・その姿は美しいといってもよかったと思う。

突然部屋のドアが開いた。入ってきたのはまた少女だった。目はおつきくてシツカリとしている。でも私はこういう子が嫌いだった。おしゃべりが多いからだ。

「あれ？小百合ちゃんいたんだ・・・？」

「・・・うん・・・。」

どうやら彼女は私が意識あることに気づいていないようだった。近くにカーテンがあつたためだろう。彼女は歩きながらしゃべっていた。

「でも・・・山城さんが怪我するなんてね・・・。」

突然入ってきた少女は短めのぼさぼさした髪でどっから見ても運動系だった。

「・・・怪我はいつも・・・してた・・・。。。。大怪我は・・・初めて・・・。」

彼女たちは私のことをいろいろと知っていた。初めて気づいたことだが二人とも同じ制服を着ていた。それも自分と同じ中学の。

ぼさつとした髪の少女はこちらを向いてきた。そして初めて起きていたことに気づく。

「あれ？起きた？」

その少女は小百合と名乗った少女と同じ事を聞いてきた。『起きた？』とは意識があると分かっているものに使うのは普通ではない。起きているのが分かっているのに起きた？と聞いて来ているのだから

ら・・・。

「えーっと・・・山城さんは何か食べる・・・？」

「いらない。私にかまわないでくれ。」

私は反対方向を向いてそれだけ言った。二人は近くにあった椅子に座った。そして勝手に喋りかけてきた。

「危なかったんだからね？私が到着したときにはあなたが空き缶入れの所で倒れていて、頭からすごい量の血を出していたからすぐに救急車呼んでさ・・・。あなた丸2日寝てたのよ？」

私はほとんどを聞き流していた。だが、ぼさつとした少女は立ち上がって私の前まで回りこんで手を出してきた。

「私は飯沼　沙羅。友達にならない？」

それが二人との出会いだった。

「二人とも・・・？何の話をしているの・・・？」

屋上に来たのは沙羅だった。声で分かった。

「二人との出会いをちよつとね・・・。」

「・・・出会いのこと・・・全部言った・・・。」

小百合の言いたいことはわかった。つまりほとんど全部話したから『ちよつと』じゃないって言いたいのだ。

私は振り返って学校の時計を見た。時間は4時30分・・・

「私そろそろ帰ろつかない・・・？」

そうつぶやいた。今はもう12月で暗くなるのが早くなっていった時期だった。空は太陽の反対側が闇、太陽のほうに光とちょうど半分に分かれていた。

「そうだね。そろそろ暗くなるしね・・・。」

小百合は同意した。そもそもなんでこんなに遅くなったのかがよく分からない。

「二人ともなんでこんな時間にここにいるの・・・？」

「部活」

二人はそろってそれだけ言った。私は部活に入っていない。と

いうか入学初日に部活加入OKは早すぎると思う。この学校はよく分らないことが多かった。どちらかといえば、校長の頭がおかしいのだ。ハゲだし……。

「……車……おくろう……か……？」

沙羅ちゃんの家は実は大金持ちで登校はみんなで行くためと拒否したが帰りは車だった。校門のほうを見ると黒い車が一台止まっていた。沙羅ちゃんの車だと一目で分かった。だって……

「佐藤さん、手振ってるよ……。」

運転手の佐藤さんは30歳過ぎの人でいつも運転手はあの人だった。私たちは手を振り替えて話を続けた。

「私は歩いて帰るわ。ありがとね。」

「うん。私もちよつと寄りたい所があるし……。」

それだけ言つと小百合は「そう……。」と少し悲しそうな声でつぶやいた。

私たちは学校を出てそれぞれの家へ帰宅することになった。

私の家は案外遠い。後半分という所まで来るともう空は真っ暗になつていた。だが、先ほどから気になることがあった。

私の後ろに誰かいる気配がするのだ。だが、何かが振り返るなといつていた。それは理性かもしれない。カンかもしれない。

だが、私は振り返ってしまった。

「ひっ……!!」

目の前にいたのは人間ではなかった。疑いたくもなるようなグロテスクな見た目……それは犬だったのかもしれない。

いや、犬の亜種だろうか……？ 頬が爛れていて肉が見えていた。そして今にも噛み付きそうな目をしていた。

さらに方一步の足が骨になっていた。それは普通死んでいるような光景だった。私は特に絶叫もせずに逃げ出そうとした。

「何かがあつても叫んではだめ!! 近所迷惑だから。」と祖母ちゃんに言われてきた。ひどい祖母ちゃんだった。

とにかく私は走り出すためにこの怪物に背を向けた。それが命取りだった。犬が噛み付いてきたのだ。狙いは私の右腕。骨はずいぶんとしっかりしていて痛かった。

左手で引き剥がしたがその際に歯が食い込んだままだった為に肉を少し引きちぎるような感じになってしまった。ものすごく痛くて、右腕はもう動かなかった。だが、私は逃げ出した。生きるために。もしも私がまだ喧嘩をしているようならば戦ったと思う。死んでも悲しむ奴が少ないからだ。だが、今はあいつらがいる。沙羅と小百合・・・だから私は生きるために逃げ出した。

公園まで来た。ここはあのアフロの不良たちがいたところだった。だが、今はそんなことを考えている余裕はなかった。

「なんなの！？あの怪物は・・・！？」

一人自分に聞いてみたが、返事があるわけでもない。

私の右腕は完全に再起不能状態だ。先ほどからものすごく痛むしもう腕を上げる力もない。それに大量の血が流れていた。

突然私の目の前を黒い影が遮った。早すぎた。私の目の前にはもうすでに怪物がいたのだった。

「わたし・・・死ぬのかな・・・？」

少しづつ意識が薄れ始めていた。だが、私は死ねない！！生きるんだ！！

「うおおおおおおおおお！！！！」

私は左手一本で突っ込んだ。

僕は今電柱のに立っていた。見ているのは一人の少女と怪物・・・『デビルドック』だった。

勝てない相手ではない。すぐに助けに入るつもりだった。だが・・・僕のポケットの中のもの光っていた。赤色に。

「適合者・・・？」

ほとんど独り言に近かったのになぜか返事が返ってきた。

『のようですね・・・覚醒するのを待ちますか？』

それは女の人の声。でも姿はどこにも見えなかった。だが、僕は気にしない。それが当たり前だから。

「死ぬ前には助けに入るよ。」

私は突っ込んで行っていきなり左腕で犬を殴り飛ばす。でも私は右利きだった。そこまで力は出ない。反対に押されて跳ね返ってしまふ。私は吹き飛んで空き缶入れに突っ込む。

そこはアフロの不良たちと戦ったときに突っ込んだところだったが、そんなのは気にしていられなかった。

犬が私の目の前ににじり寄ってくる。すぐ近くにその犬はいた。

私が想った事は沙羅と小百合のことだった。今まで一緒に話あったこと。小百合の家に行った事、宿題を移させてもらったこと。いろいろだ。でも、そんなことを思うと・・・

「私は・・・死ねないんだ・・・！！！」

私はよろけながらも立ちあがった。犬はこちらに飛び掛ってきた。今は意識もしっかりとしていた。

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

私は叫んだ。そのとき私の体が光だした。真っ赤な赤色に。だが、明るくならない。つまり光りだしても懐中電灯のように道がよく見えたりとはしなかった。光源がおかしいようだ。

そこまで考えたときに犬が近寄っていることに気がつく。私は左腕でストレートを放つ。時間稼ぎにはならないとしても、やれることだけはしたかった。そのとき『よし！！』という声が聞こえた。そちらの方向を向くと電柱に誰かが立っていた。月をバックにしているために誰かはよく分かった。だが、それはあまりにも意外な人物だった。

「高野・・・？」

あの危ないといわれた少年だった。服装は少しおかしかった。真っ黒な服で風になびいていた。

「やっぱり僕のこと見えるんだね・・・君だ。これを持って!!!」  
高野は何かを投げてきた。暗闇の中でもそれをキャッチできたのは私と同じ色に輝いていたからだ。

「『解放』と唱えるんだ!!!」

私はよく分からないが言われるがままに唱えた。

「解放!!!」

赤い光が強さを増した。

小百合は佐藤の車の運転で家に帰る途中だった。だが、何か胸騒ぎがするので、ギンの方へと行くことにした。

「・・・佐藤・・・ギンの帰り道・・・そっち・・・。」

「はい。お嬢様。」

車は後数分で公園の所に来るところだった。

私は正直これは夢だと思っていた。

変な怪物の犬、電柱の上に立つ高野。そして・・・いきなり現れた剣。

「何なのよこれ!？」

これとは、自分の手元にある少し大きめの剣だった。もちろんここは日本だ。こんなものを持っていれば捕まることは必死である。

私があたふたしていると声が聞こえる。

「その剣でその犬を斬れ!!!」

私はすぐに正気に戻った。目の前には敵がいるのだ。この剣ならばなぜかあいつを倒せるような気がした。だが、右腕は噛み付かれていたのではとど動かない。左手で振るしかないのだ。

利き腕の反対で使うのはあんまりよくないほどの重さだ。当たっても致命傷にはならなかった。それに、体力がそんなに持つとは思えない。

一撃で決める必要があったのだ。だが、一撃で仕留める方法など知らない。知らないはずだった・・・

「はあああああああああ！！！！」

私は左手で剣を持ち上げ、地面と平行になるように引いた。それを右手で支える。そこまでやると体を覆っている赤い光がさらに強く光りだした。

敵のデビルドックもこちらの出方を伺っていたが、やがて突撃して来た。途中から口を開いて飛び掛ってきた。その起動の先にあるのは私の首。噛み付かれたら間違いなく死ぬだろう。

私はデビルドックのジャンプのタイミングに合わせて、その格好を維持したまま突撃した。そして一気に剣を突き出す！！

『豪突閃<sup>じゆうとせん</sup>』

知らぬ間にその技の名前を口にしていた。

私の剣の突きは、デビルドックの空けた口に入った。そのまま剣から自分と同じ色の何かが発射されたと思うとデビルドックの体は口から避けて上下に真つ二つになった。

だが、二つに割れても生命力は高くてもまだ生きていたのだ。上の部分の方がそのままのスピードで襲ってきた。

ガジュサ！！

デビルドックの上半分の歯が左腕に噛み付く。そのまま離そうとしない。左腕は皮を突き破られて血が垂れ始めていた。

上半分の体を振り落とそうと考えたその時何かが私の首に突き刺さった。それはデビルドックの下半身だった。

口から避けてきってしまったので下の部分には足が四つあった。そのまままた跳躍したのだろう。左腕を見ていたので気づかなかったのだ。首に突き刺さった歯の力が上がった。それと同時に首から鮮血が上がる……。

「ちっ」

これは誤算だった。『デビルドック』は確かに初めて『解放』した者には少しきついとは思ったが、あの山城 ギンなら大丈夫だと思っていた。

たしかに『デビルドック』ならば先ほどの豪突閃で勝っていたことだろう。『デビルドック』ならば・・・。

アレはデビルドックではなかったのだ。アレはよく似ているが、『デスデビルドック』・・・『死の悪魔犬』。つまり簡単には『死なない』のだ。

『デビルドック』の危険度はC。『デスデビルドック』はB+だった。その違いは歴然だったのだ。

僕は急いで助けに入ろうとした。せつかく適合者を見つけても、死なせては元も子もなかった。それに豪突閃ができたのは奇跡しか言いようがなかった。それだけでも収穫はあったと思う。

そして僕は電柱を下りようと思った。だが、そこで誰かの声が聞こえた。

『解放!!』

私は目が覚めたときに病院にしていると分かった。首元を確認している。自分の首はしっかりとついていた。

私が最後に覚えていることはあの犬に首をかまれたところだった。首を確認した後、私はもう一度天井を見た。その天井には見覚えがあった。不良達と戦ったときの天井だった。

足元が重いと思って上半身を上げてみた。足元には小百合ちゃんが寝ていた。看護に疲れたのだろう。

私は次に窓を見た。空は夜だった。星たちがきらめいていた。

（あの時・・・あの宝石を使ったことは覚えている・・・。）私は机の上にあるあの時の宝石に気づいていた。知らぬ間に気づくようになってしまっていた。

それに・・・最後に私を助けてくれた人・・・それも気がかりだった。俺は言わないといけないのだ。ただ、高野ではないことは確かだった。首をかまれた時点で視界はほとんど無くなっていたが聴力はあった。あれは女の子の声だった。まちがいない。

また視線を足元に戻して足元に寝ている小百合ちゃんの頭をなでた。

「はぁ〜ん・・・優しい顔しているじゃないか・・・？」

突然声が響いた。私は驚いて扉のほうを見た。知らぬ間に扉は開いていてそこから高野がこちらを見ていた。

こちらの視線に気づくとこちらに近づいてくる。目の前まで来るとすぐ近くにある椅子に座った。

彼は一度宝石のほうを見て、またこちらを見てきた。

「この前のことは覚えている・・・？」

高野はいきなり聞いてくる。あのことは忘れなくても忘れられないことだった。

「うん・・・。」

「あの時宝石を使っただろ？赤色のさ・・・。アレは『クリスタル』と呼ばれている。それぞれに意思があるんだ。」

「意思・・・？」

「ああ。俺のクリスタル『翼天』よくてんは20代の女の人だけだな。」

『よろしく。』

どこからか声が聞こえてきた。それは彼の持っていた宝石であることにすぐに気がついた。

「名前は・・・？」

「君のクリスタル？それはね・・・自分で決めるんだよ。」

「私が・・・？」

「クリスタルと意識をあわせるんだ・・・って言っても難しいな・・・。まあ、とにかく今は怪我を治せばいい。」

それだけ言い残すと高野は部屋を出て行った。私はもう一眠りすることにした。

クリスタル・・・その単語が最後に頭に浮かんだものだった・・・。

僕は正直に驚いていた。

まさか彼女が出てくるとは思ってもいなかったのだ。

「友達と言うのは偉大だなあ・・・。」  
本心だった。

僕は彼女の部屋から出た後に報告へと急いだ。僕の考えでは彼女は即戦力だった。

「一緒に旅をすることになるな。」

僕は独り言をつぶやきながらどこかへと消えてしまった。

## 第二話 君の名前は――！！

私が目を覚ましたとき、小百合ちゃんはもうすでに起きていた。小百合ちゃんは窓辺に立っていた。そこはちょうど日の出の方向だったので、少しまぶしかった。

「・・・おはよう・・・」

小百合ちゃんはこちらの視線に気づくと挨拶をし始めた。とりあえず私も挨拶をした。

「おはよう。」

だが、欠けていた。この二人に欠けていたもの・・・それを持っている人物は・・・

ドガン

ドアを思いっきり開く音が聞こえた。キツチリと言うがここは病院なのだ。そんなに大きな音を出せばほかの部屋の人が困る。

そう思っていたのはギンと小百合の二人だけだった。ドアを思いっきり開けた本人はまったくそういうことを考えない。

「おっはよー！！！！」

入ってきたのはやつぱりというか何というか沙羅ちゃんだった。

声の大きさにも問題があることは言うまでもなかった。だが、やつぱり本人は気にしていない。私は呆れてため息を一つついた。

「あんれえー？どうしたの？疲れてるの？」

「呆れてるの！！あんたに！！」

「・・・ギン・・・声・・・大きい・・・」

小百合ちゃんに注意されてしまった。病院というのは怪我や病気を治すのには良いがそういうところはキツチリとしている。

私はとりあえず仕切りなおしの咳払いを一つして話を進めた。

「で？沙羅ちゃんは何しに大声で突入してきたわけ？」

「見舞いに決まってるでしょ？見舞いに。」

「・・・沙羅・・・声・・・やつぱり大きい・・・」

今度は沙羅ちゃんが注意されてしまった。沙羅ちゃんは小百合ちゃんのほうを向くと右手片手でごめんのジェスチャーをした。

小百合ちゃんは無口だが、意外としっかりしている。二人の仲裁役だといっても過言ではない。

とりあえずそれから数分間、二人は部屋で会話をして帰っていた。幸い今日は日曜日。学校はないのだ。

私は二人が帰った後にベットに潜り込んでふうふうとため息をした。こうすると昨日の戦いが嘘の様に感じられた。だが、嘘ではいと体中の傷が訴えていた。

私は右手を出して拳を握ったり解いたりした。昨日かまれた傷のせいで上手くはできなかったが、感覚は戻ってきた。

そこへまたあの人が入ってきた。

「調子はどうだい？山城さん・・・？」

私は声で大体誰かは分かった。この声の主は高野だ。あいつ以外には考えられなかった。わたしはドアのほうに顔を向ける。案の定そこには高野がドアにもたれかかっていた。

数秒すると高野は動き出して私のすぐそばにあった椅子に座った。

「この前の犬のことはしっかりと覚えているかな？」

「あ・・・うん・・・。」

「君はいろいろと知れたがっているようだから教えてあげるよ。まずはクリスタルのことだね。」

高野は首にかけてあったペンダントを見せてきた。先には私のと同じ宝石がついていたが、色が水色だった。

そのペンダントはすぐに高野の首へと戻されてしまった。

「このクリスタルは君のものとほとんど同じさ。クリスタルはそれぞれ意思を持っている。ちょっと自分勝手なところもあって、それぞれ誰につくかを生まれてくるときに決めるんだ。」

そしてクリスタルにはそれぞれ系統がある。僕のクリスタルは槍君のクリスタルは大剣みたいだね。」

そこまで言うとな彼はいったん区切りを入れた。その視線には沙羅

がお見舞いにともってきた果物があつた。特に視線はみかんへと注がれていた。

私はみかんを取り出してそれを高野に渡した。高野は嬉しそうに笑いながら皮をむき始めた。

やがて向き終わるとまず一切れ目をほおばった。高野は幸せそうな顔をした。みかんが好きなんだろうと思う。

二切れ目を食べながら高野はまた語りだした。

「クリスタルに認められたものを一般的には『適合者』と呼ばれる。ほかには『クリスタル』とも呼ばれることもある。君はその赤いクリスタルに認められて適合者の一人になったのさ。

そして最後に君に襲い掛かってきた怪物だが、通称『ティガイス』と呼ばれる。ほかには『T・G・S』とも呼ばれることもある。

ランクはDからSSまで区切られる。以下のとおりだ。D、C、B、A、A、A、A、A、S、Sと分かれている。それにそれにプラスやマイナスがつくときもある。C＋、B－、B、B＋という感じに分けられる。プラスとマイナスはどれにでもつくからな。

君が戦った『デスデビルドック』はB＋で初心者には少しきついものだった。本当は『デビルドック』というCと戦っているはずだったんだが……。すまなかった。」

高野は深々と頭を下げた。私はあんまり気にしていなかったけれどもね。

不意にみかんを食べ終わると高野は席を立った。

「後2、3日ほどで退院はできると思う。それまでしっかりと休んでいればいい。」

そこまで言う和高野は部屋を出て行った。高野の言ったことはほとんどが理解できなかった。

ただ・・・高野は真剣だったことにギンは気づいていた。それからは平和な日々が続くのだった。

「姉さん・・・起きてる・・・？」

暗い部屋に一つの声が響いた。ここがどこかはここにいるものしか知らない。

「起きてるよ。レイン……。」

姉さんとよばれた女の人は返事をした。この人は髪を腰まで伸ばした金髪の女性だった。

それに対しレインと呼ばれた少年は黒髪のぼさつとした感じの髪形をしていた。二人とも年は15歳くらい。若かった。

だが、姉さんと呼ばれたほうは少し年上だろう。見た目よりも雰囲気は物語っていた。

「あと少し……あと少しで……僕等は自由になるんだね。」

「ええ……後もうちょっとよ……我慢しましょう……。」

二人とも金色の目をしていて、キラリと一瞬光ったようにも思えた。

三日後私はめでたく退院できた。だが、少しの間右腕にはかなりの痛みがあるそうだ。まだ感知とはいえないのだ。

病院から出るとすぐ入り口には小百合と沙羅が待っていてくれた。

二人はこちらに気づくと一目散に駆けて来た。

「退院おめでとう。うん……ギブスはやっぱり取れないのね……。」

そういったのは沙羅だ。小百合はこんなに長く言葉を発することはほとんどない。私は二人にお礼を言って手を借りながら家へと帰ることとなった。

そういえば……家の説明は全然してなかったっけ？一応お見舞いにも来てくれたけれども、全然そのことは話さなかったよね？

なんだかねで気づけば私の家に到着した。見た目は普通な一軒家。私はドアを開けて『ただいま』と言った。

ドタドタ

誰かが走ってくる音が聞こえる。この時私は物凄く嫌な予感を覚えた。そしてそれが見えたと同時に飛びついてきた。

「おかえり〜。」

飛びついてきたのは女の子で私にそのまましがみ付いて頬擦りを何回も何回もした。だが、飛びついてきたときの反動で私は後ろに倒れた。ドアは開いていたのだ。その際右腕が下敷きになったことは言うまでもなかった。

「いったああああああああああい！！！！！！」  
久しぶりに帰った家に私の絶叫が響いた。

彼女は山城 レモン（やましろ れもん）。ツインテールの金髪少女で中学三年生の私の妹。シスコン（笑）な所があつて小さなころから抱きついて来る。

実を言うと私と正反对だが平和主義者。正反对すぎたね。

「うんうん。結構元気じゃないか・・・。」

奥から出てきたのは私のお父さん。山城 やましろ 創英 そつえい。なんか普通の人だ。ただすごいのは都道府県の名産物を全ていえることだった。どうでも良いがすごいものだった。

「と・・・父さん・・・た・・・助け・・・て・・・。」

レモンは先ほどから私にしがみ付いてきている。私の重さとレモンの重さが右腕にかかっている。さらにレモンは頬擦りのために動くからまた厄介話だった。このままでは病院に帰ってしまいそうだった。

「レモン・・・どいて・・・。」

「ミシャウ？あ！！！！ごめん。痛かった？」

そりゃ痛いわ！！とは言えずに苦笑いをした。右腕は先ほどからズキズキしている。

とりあえずレモンは退いてくれた。レモンはたまに猫っぽくなる所があるのはあまり気にしないで欲しい。切実なお願いだ。

ああ、それと母さんもいるのだが、ここ一ヶ月いないのだ。理由は二ヶ月ほど外国へスキーに行きます。だそうだ。今は春・・・。スキーは日本でもうできないから外国へ飛んでいったが・・・二

ヶ月って長！！とか思いながらも地道に待っている私たちだった。

「二人とも上がっていいよ。」

父さんが沙羅ちゃんと小百合ちゃんに笑顔で言った。二人は遠慮がちに我が家に入った。二人は私のうちに入るのは初めてだと思い直す。私は少し笑いながらドアを閉めた。

そこは暗闇。何もない所だが、二人の何かがいた。一人は少年、一人は女性だった。

「そろそろ兄さんも起きるころか・・・？」

「ええ。そしてあと少しで計画は発動する・・・。」

二人はニヤリと笑った。最初は気づかなかったが二人の目の前には何かがあった。それは水の音を出しながら動くことなくあった。

家の中ではレモンと共に他愛もない話をした。二人ともすごく楽しんできた。今私はテーブルにおいてあったおかしやコップの片づけをしている。ただの後片づけだ。

最後にテーブルを拭いて終わり。私は少し伸びをやった。腰が少し痛かった。

「聞こえるか？山城さん？」

急に声が聞こえた。私は少し驚き、そして冷静に考えればその声は高野だった。

「なんで私の頭の中にあなたの声が聞こえるのよ！？」

「適合者は同士で頭の中で会話ができる。言っていなかったか？」

「言っていないわよ！？」

私は眉間にしわを寄せながら頭の中で怒鳴った。

「で？急に何の用なのよ！？」

「・・・近くにティガイスの反応があったから報告しただけだ。」

「何で私に言う必要があるのよ！？」

「君は適合者なのだ。この日本・・・いや、地球を守りたいとは思わないのかね？ティガイスは倒さないといけないんだよ。」

『ならあんたが行け。』

『あゝ俺は今海外にいるからよろしくね。』

『はい！？学校は！？』

『昨日からいないぞ？って、お前は今日退院したんだから知らないか……。とりあえず急いでくれよ。』

『分かったよ。どこに行けばいいの？』

『桜坂公園。』

え？桜坂公園……。確か二人は歩いて桜坂公園に行くって……。急いでいかないと！！！

私は急いで家を出た。目的地はあの公園……。デスデビルドックのいた所だ。

「あつ。」

私はあることに気づいて家へ戻った。急いで自分の部屋に入って机の上においてあった首飾りを手に取る。先っぽには赤いクリスタルが着いていた。

私はそれを手にとり首にかけて家を出た。そして公園へと急ぐ。ここから走れば20分程度でつく距離だった。

公園に着くとベンチに座って会話をしている二人が目にとまった。あの位置から今の場所は死角となっていてははずで見えない。

私はティガイスを探した。その時スパアという音と共に右の頬が切れた。私は何が起きたか分からなかった。

私は目を丸くして自分の頬を触る。赤い血が流れていた。私は驚いて周囲を見回したが何もいなかった。ティガイスも人間の姿もなかったのだ。

「ミヤア~~~~。」

猫の声がした。反射的に首を左に傾けたのが功をきした。また右の頬に傷ができたのだ。それも先ほどよりも深めに三つほど。もしも首を傾けていなければ相当深く入っていたに違いない。

私はとりあえず右を向く。やはり何もなし。だが、何かがいるこ

とは間違いなかった。その時黒い何かが前を瞬時に横切った。わたしは動体視力はいいほうだからそれが何かは分かった。

黒い猫だった。黄色い目で鋭くこちらを睨んでいたようだ。だが、相当早かった。私は次はどこから攻撃してくるかを注意した。

奴・・・『ブラックキャット（危険度C+）』は後ろから仕掛けてきた。私はそれを察知するとしやがんで避ける。素手ではかないそうにない。私は首にかけてあったクリスタルを手に取り、一言つぶやく。

「解放！！！」

クリスタルは見る見るうちに大剣へと変化した。私はその大剣を両手で持つ。そして『ブラックキャット』のいる所をそれでなぎ払う。はずれた。

さすがに大剣では攻撃速度が問題だった。振っている最中に避けられてしまうのだ。

まずかった。決定的な何かにかけている。

――私に名前を――

か細い女の人の声が聞こえた。私は誰の声か分からなかった。

――私に名前を！！――

もう一度同じセリフが聞こえ、それと同時に私は無意識のうちに目をつぶってしまった。

気づけばそこは虹色の世界だった。そこに私は一人ぼつんと立っていた。

ブラックキャットはどこにもいなかった。ただ一人少女が立っていた。髪は赤色で腰の辺りまで伸びていた。服は白っぽい服でワンピースだった。

少女は片手をこちらに向けてきた。まるで何かを求めているかのように。

「名前をいただけますか？」

少女は笑顔で語りかけてきた。私には何かなんだか分からない。

だが、次の言葉で私は理解した。

「私は名のないクリスタル。あなたを選んだクリスタルです。今私とあなたは心を一つにしている。今ならあなたは私に名前をつけます。いや、つけてください。」

いきなり言われてもつけようがなかった。だが、その時一つのビジョンが見えた。

それは森の中での出来事だった。男が一人。目の前には怪物が多数。

男は首にかけていたクリスタルをとりだした。色は赤。そして男は何かをつぶやいた。それと同時にクリスタルは大剣と化す。

男は毛縁を構える。それと同時に怪物たちも動き出した。大剣をつまく使って敵をなぎ払っていく。すごい速さで。

そして最後に男は変な構えをした。そして一閃・・・それは竜の形をして敵を飲み込んだ。

そこで映像は終わっていた。それはクリスタルの記憶だったのだと思う。

目を開けたとき今の状況を判断する。

手の中には大剣が。目の前にはブラックキャットがいた。その先にはベンチに少女が二人いる。

私は目を閉じる。そしてつぶやく。

「クリスタル・・・私はあなたに名前を上げる。だから私に力を頂戴。」

ブラックキャットが攻撃を仕掛けたのが分かった。何故なら左の頬が切られたからだ。痛かったが、我慢をしてクリスタルの名前を言う。

「あなたの名前は『赤竜』。」

それと同時に自分にあの髪の長い少女が重なるような感覚に襲われる。

その少女はつぶやく。

「私の名前は赤竜・・・赤竜!!!!」

私は目を開ける。曾木ほどと状況はほとんど変わってはいなかった。だが、持っていた大剣のクリスタルがついている部分は赤く光っていた。

私はクリスタルに喋りかけるように言う。

「いくよ赤竜!!!!」

「はい。マスター!!!!」

元気のいい少女の声が聞こえた。それはクリスタルの声だと直感が物語っていた。

私は大剣をしっかりと両手で握り顔の横に構えて剣の先を敵に向けた。そして力をこめる。すると足元から赤い風が出てきて私の周りを渦巻いた。

ブラックキャットが私に飛び掛ってきた。

『せきりゅうせん  
赤竜閃!!!!』

私はそう叫びながらそのまま怪物に向けて剣を突き刺すようにまっすぐと剣を伸ばした。

すると剣から赤い竜が出てきた。それはブラックキャットを飲み込んで天へと上って行ってしまった。

私は数分間それを見つめてその後剣をクリスタルに戻した。その時私は物凄い脱力感に襲われてひざをつけてしまった。そのことに私は物凄く驚いた。

そして目の前には誰かが立っているのが分かった。靴が見えていたから。

「そうか・・・赤竜閃を使ってその程度の疲れと言うことは・・・相当な精神力だな。」

私はぼける目を上へと向けた。そこには高野が私を見下して立っていた。

少しむかついたが体に力が入らないためにどうすることもできないのだ。

「まあ、クリスタルの名前が決められたんだからよしとするか。よろしくな。赤竜さん。」

「はい。」

「私は翼天。よろしくね。」

高野の持っていた水色のクリスタルがしゃべった。私はそこまで確認した後前に倒れた。完全にうつぶせの状態へと変化する。

僕は結構驚いていたりした。

初めてクリスタルと心を通わしたのに強い技が使えたり使ったわりにひざをつく程度で済んだりとかかなりの精神力があると分かる。それは鍛えれば僕を完全に超えそうだった。

僕は微笑んだ。心からの優しい笑顔だったと思う。

僕はしゃがんで背中に山城を担いだ。そして道を歩いた。目的地は山城の家だった。

そこは暗闇・・・そこには三人の人型の影が合った。暗いのでそれが人間かどうかはいまいちよく分からなかった。

ただ、一人は少年、一人は女性、一人は男性だと言うことだけだ。

「おはよう。兄さん。よく眠れた？」

「・・・ああ・・・。よすぎるほどにな。」

「では、始まるのですね・・・？」

「ああ・・・。世界を手に入れるための力を集めるな・・・。」

「楽しみだよ・・・兄さん・・・。」

その真つ暗な世界に笑い声が三つ響いた。

そして三人は闇に消えた。

私が目を覚ました時天井が見えた。それは見慣れた天井で自分の部屋だった。

「お目覚めですね。マスター。」

赤竜が話しかけてくる。どうやらあの後高野に連れてこられたよ

うだ。

布団から上半身を起こすと頭に痛みが走った。

「痛!!!!」

「駄目ですマスター。精神力をたくさん使いすぎて体に負担がかかっています。」

赤竜はよく分らないことを言い始める。

「私と心を通わせて使う技だと精神力を使うことになります。精神力を使うと普通の状態にはなれません。だから体力と同じように重要視しなければなりません。」

「精神力・・・。」

私は自分の右手を見つめた。力は戻り始めているのは実感できる。精神力と言うのも体力と同じで時間がたてば回復するようだ。

とりあえずその時思った事は（最近倒れること多いなあ・・・）だった。

「マスター・・・私はいつまでもマスターと共に・・・。」

それを聞いた後にとりあえず私は寝ることにした。今は夜・・・とりあえず明日は学校に出れそうだ。

「どうだ？」

研究所の中に少年の声が響く。少年の名前は高野 宗次。高校一年生だ。

今はパソコンに面と向かって何かを記録している男に向かって声をかけている所だ。

パソコンの画面には多くの数字が書かれていた。まず右上には1835と書かれている。これは僕の数字だ。

そして左上には2565・・・これは僕の上司のあの人のものだ。違いすぎるのは残念だった。

そして下には数字がかわるがわる変化していた。これは山城ギンのものだ。今はまだ測定中・・・結果は出ていなかった。

「どうでしょうね・・・。データが少なすぎるような気がします。」

「・・・」

ピッとパソコンから音が出たと思うと数字が出た数字は1632・  
・。かなりの数値が出た。

「おいおい・・・すごいなあ・・・これは・・・。」

「ええ・・・。こんなに高値が出るとは思いませんでした・・・。」

だが・・・その後ピツという音と共に・・・

「何じゃこりゃ!？」

「ありえない・・・!!!!これが彼女の潜在能力だというのか・・・?  
」

「これはいい拾い物をしたのかもな・・・。」

翌日学校では友達たちが心配して声をかけてきてくれた。

「ふう〜久しぶりに学校に来て疲れた〜。」

私はいすに完全にもたれた。そしていすの背もたれに首を乗せた。  
ちようと天井が見えるが首の付け根が痛い。

私は目を閉じると先ほどの授業の数式が出てくる。私は急に目を  
開けてウエっと言った。授業なんてかつたるかつた。だって中学の  
ころはまったく勉強していなかったのだから・・・。自慢じゃない  
けれどもね。

私は後ろにもたれるのをやめて今度は前にもたれた。自分の顔が  
机でつぶれるんじゃないかと思えた。

とりあえず机と同化しそうな感じだった。なんか目がとろけてい  
る様な気がする。

私の目の前では人がやたらと行ったり来たりしているような気が  
した。そして私の前に二人の生徒が立つ。

「珍しい人が珍しくとろけてるねえ〜」

「いいじゃん沙羅。何か気持ちいいし・・・。」

そしてどんとどんとギンの顔は伸びていった。

「ギン・・・とけてる・・・。」

「いいのいいの。次はどうせ移動授業じゃないし。」

二人の女子生徒は呆れて自分たちの席へと戻ってしまった。

私は寝返りを打つかのように反対方向を向く。私の席は窓辺のほうなので空が目に入る。空の中には白い雲が流れていた。

私はその雲と同じように流されていくような気がした。

授業が終わり、私は現在公園の中央の噴水近くに来ていた。

この辺はあまり人氣がなく、人通りが少ない。てか全くない。何故ここに来ているかと言われると・・・

「なんなの高野？私をこんな所に連れ出して・・・？」

そう。私は一人ではなかった。目の前には高野がいる。なんか知らないがかなりうれしそうだ。

「え？これからいいところに連れて行ってもらうんだよ。」

「いいところ？てか誰に？」

「いいからいいから。そろそろ時間だし・・・」

そこまで言ったと同時に足元に変な模様が浮かび上がる。それは円の中には六星が描かれて回っている。彼はこの中に入れとってきた。彼も中に入る。

「これは・・・？」

「『六星』<sup>ろくせい</sup>って言うんだけどね。転送系の魔法だよ。」

「魔法って・・・非現実的な・・・。」

「クリスタルの適合者が言うことじゃないよね？」

たしかに。私は草思った。

それと同時に六星が上に上がってきて私たちを包み込んだ。人通りが少ないためにその光景を見る人など存在しない。

その光は次第に明るさを増していき、やがて私たちと共に消えた。後に残ったのはその光景を見ていた鳥たちだけだった。

私はあまりのまぶしさに目をつぶってしまった。光の強さが弱くなってきた、私は目を少しずつ開けていく。

先ほどの光のせいで少しぼやけて見えにくい、しだいと目が慣

れて見やすくなってくる。そこはどこかの廊下のようなだった。

青っぽい壁が横一列に続いている。自分たちはその壁のくぼみに位置している所にいた。転送機だと思われる。

とにかく私は周りを見回して確認する。左右の道の先にはドアがある。その距離30メートル。ちょうど中央に位置しているのがこの転送機の様だ。天井にはいくつか電灯のような物がついている。かなり明るかった。

隣にいた高野が歩き出す。途中でこちらを向いて「ついて来て」と言っている。私は右に曲がって高野の方に行った。

少し歩くとドアが目の中の所まで近づいた。そこで高野は二回ノックをして

「適合者N0.2の高野宗次です。失礼します。」  
といってガチャリとドアを開けた。

ドアの先は部屋だった。テレビがあり高そうなソファがあり、そして壁にはいろんな絵が飾られている。

その部屋の中央にあるソファに一人の女の人が座っていた。

髪は少し長めで青い綺麗な髪をしていた。服は私服というよりむしろ軍服に近い。彼女はこちらに気づくと手を振った。

「おい宗次、そこに座って良いよ、（、）、（、）」

うっと私は思った。先ほどは顔を少し下げていたからよくは分らなかったが綺麗な瞳をしている。綺麗な水色だった。だが、うっと思っただけはそんな所ではなかった。

彼女は手を振っていた。顔が物凄くとけていた。ちょうど学校での今日の私のように。

彼はやれやれといった感じでため息を一つつくとその女の人に声をかける。

「母さん。お客さんが来てるんだからしっかりしてよね。」

え！？母さん・・・？確かに高野はそう言った。この物凄くばけつとしたとろけてる人が・・・？（あんまり人のこと言えない）

その母さんといわれた人は少し真剣な顔つきになって私を見た。

少しすると顔の形が変わっていき・・・また元のとろけた顔へと変化してしまう。それを見た高野はその女の人に近づいていった。

「母さん！！すっかりしてよ！！」

「ははは・・・宗次にもやつと恋——」

女の人はその続きが言えなかった。宗次が思いつきり足を振り上げて振り下ろしたのだ。物凄い音が部屋に響き渡った。

ダガン！！

その音と共に彼女の表情が凍る。

「母さん・・・お客さんに物凄く失礼じゃないかな・・・？」

「あ・・・いや・・・それは・・・」

「失礼じゃないかな！！？」

「・・・ごめんなさい。」

結局折れたのは女の人のほうだった。怒ったときの高野はすごい声を出すんだと私は怒らせないようにしなれと思った。

高野は満面の笑みでこちらを向いてきて「お恥ずかしい所を見せてしまい申し訳ありませんでした。」といった。だが、その裏に物凄い怒り等があることに私は気がついていて。とりあえず冷や汗をかきながらハア・・・と相槌を打つ。

「山城さんはそこに座っていいよ。」

彼がソファの一つに指を刺した。私はそれを見て場所を覚えてそこに座る。高野もほかのソファに座った。

私の席は女の人と真正面に向かい合う場所だった。高野の席はその状態がちょうど見える中央の右の所だ。高野は二人の話の成り行きを見守るような役目なのだと私は思った。

女の人は不意に真剣な顔つきとなる。それは急激な変化だった。急激過ぎて私は若干引いてしまった。（素で）

「では・・・いろいろと話をさせてもらおうかしら・・・？」

彼女は手を組んでテーブルにひじを両方ともつける。その手の上に額を乗せた。その状態では子たから彼女の目を見ることはできない。かなり真剣な態度の予感だった。

### 第三話 ギンの三日間の決断

私は重い足取りで家へと帰る。時間はすでに7時を回っていて空は真っ暗だった。

私の気はかなり重かった。今私は重大な問題を抱え込んでいるのだ。それは家を少しの間出るか否かだった。

だが、出るといった場合一番問題なのはレモンだ。彼女がいったい何を言い出すか分かったものじゃなかった。

とか何だかんだ言って現在地私の家の目の前。ポストの近くに立っております。とりあえず私は今日あった出来事を思い出す。

私はある場所へとつれられてきた。ソファにすわり人物を確認する。

右側には高野が座っていた。目の前には高野のお母さんらしい人が座っている。

女の人は手を組んでテーブルにひじを両方ともつける。その手の上に額を乗せた。その状態では子たらから彼女の目を見ることはできない。かなり真剣な態度のようだった。

「とりあえず自己紹介をしておきます。私の名前は高野 レイラ（たかの れいら）。一応外国人よ。」

「知つてのとおり僕は高野宗次。」

「私は山城ギン。」

「ギンちゃん・・・あなたは確か宗次と一緒に適合者だったわね・・・？」

「はい・・・。」

「うん・・・じゃあ、悪いんだけどクリスタル集めを手伝って欲しいんだよね。」

私はいきなり思いがけないことを言われてしまった。

「知つての通りこの世界にはクリスタルというものがあるの。あな

たも使っているからよく分かるわよね？クリスタルの数はよくは分かっているけれども15前後あると分かったの。

とりあえず私たちは8つ手に入れて3人の適合者を見つけたのだけれども、その数はまだ半分だけだった。

私たちがクリスタルを使うのは世界中がティガイスで埋め尽くされるのを抑えるため。つまり世界を救うためってことかな・・・？それを成し遂げるためにはクリスタルを使う必要があったの。

だけれどもクリスタルは自分を使う人を選んだ。それが適合者。

クリスタルは昔一つだったといわれているんだけど昔に砕け散ってあらゆる方向に飛び散ってしまったらしいんだ。そのかけらの一つがあなたのクリスタルってこと。

でも、最近ティガイスの繁殖量が増え始めてきたの・・・前は一週間に1匹くらいの割合が今では2日に1匹は出るようになってしまったの・・・。さすがにこの先を考えると2人ではきついなあ・・・？と思って適合者を探し始めたのが2ヶ月ほど前。やっと三人目を見つけられてほっとしてたりするんだけどね・・・。」

そこでいったん話を区切ると女の人・・・レイラさんは目の前にあったお茶に手を出す。

ズズズとお茶をすすってお茶をテーブルに置くとまた話し始める。その間高野はどこから取り出したか全く分からないみかんを頬張っていた。レイラさんは高野のほうを羨ましそうに見ていたが、こちらの視線に気がつくとか咳払いをして話を再開する。

「ううん。今までは8個集まったからいいと思っていたけれども、最近はそのも言うってられなくなったの。」

ティガイスの中には魔力を多く持つ者がいて、クリスタルを改造することに成功したの。そうすることで適合者を自分たちの好きなように変えていった。それはもちろんティガイスだったのだけれども・・・。

クリスタルには大きな力が宿っているの。解放をしなくとも持っているだけでもティガイスの危険度を2か3くらい上げることでも

きる代物……。そんなものは早く始末する必要があるの。」

それを聞いたときに赤竜が息を呑んだのが私は分かった。新しいマスターが見つかったのに封印されるなんて嫌だったのだらうと私は思う。

『ま……。マスター……。私は……。』

「分かつてる……。」

私は軽くうなずいた。それは周りから見れば心細いが赤竜から見ればかなり心強かった。

「で？ 気づいてた？ この場所……。実は戦艦とかそういう類なのよね。」

私は急にレイラさんがしゃべり方を変えたのを聞いてかなり驚いた。先ほどから少し下を向いていたのでレイラさんのほうを見ていなかった。すぐに顔を上げてみると、そこには顔のとろけたレイラさんが座っていた。

急に高野の目が鋭くなる。その眼光の先にはレイラさんがいた。

「窓の外見てごらん。外は宇宙なんだよ。」

私は言われるがままに窓の方を向いた。そこは確かに宇宙だった。星がきらめいているあの宇宙だ。ちよつと左のほうには青い地球がある。確かに地球は青かった。（笑）

レイラさんが説明不可能だと高野が感じると、次に高野がいろいろと話を進める。

気がついたときには高野の手にはミカンの皮すらもなかった。

「基本的に僕らの機関に入ってくれるなら衣食住はもちろんでちゃんと給料みたいなものも出すよ。ただ……。どうしても済むところが機関の中になっちゃうから……。」

高野の言いたいことは分かった。だから私はその問いかけにNOといってやった。

高野はやっぱりという感じでかくつと肩を落とした。だが、すぐに顔を上げるとまた話し始めた。

「でも、できればこのクリスタルのことには手伝って欲しい。」

クリスタルの反応が出れば転送機で飛んで行き、ティガイスと戦い、適合者を見つける・・・」

それならいいよと私はOKを示した。だが・・・

「これに手伝ってくれるならばこれから任務中この戦艦・・・アスカに住んでもらう事になるのだが・・・。」

それは私の判断を狂わせた。NOと答えたかったが地球を守るためとか言われるとYESとも答えたかった。

だが、それは自分勝手なことと分かっているながらも家族と一緒にいたいとか考えてしまうので、どうしてもその場で答えることが私には全然できなかった。

「まあ、こんな重大なことすぐには決められないよな・・・3日ほど答えを待つよ。その間友達や家族に話すといい・・・。」

それだけ高野は言った。その後のことはよく覚えていないが確か転送機に乗ったような気がした。

私はそこまでの事を頭の中で思い出すと家のドアを開けて中に入った。

家ではちょうど晩御飯が出来上がった所だったようで晩御飯のにおいが立ち込めていた。今日はカレー・・・それだけで分かる。

私がただいま～と言うと一目散に駆けて来る音が聞こえる。このパターンはもうだいたい飽きたのだが・・・

「おかえり～!!」

黄色いツインテールが宙を舞う。それと同時に私の体も中に舞った。

ゴツンと嫌な音と共に私は後頭部に物凄い痛みを感じた。真正面からレモンに抱きつかれたために後ろに倒れる結果となってしまうのだ。かなり痛かった。

「おかえり～遅かったね。」

レモンに引き続いてゆっくりと歩いて出てきたのは父さんだった。糸目なのでエプロンと三角巾が案外似合っていたことは内緒だ。

私は左手でレモンをどかすとその場で立った。右手はまだ少し痛かった。

私はとりあえず二人に自分の部屋に行く。といって自分の部屋へと急いだ。否・・・急ごうとした。だが、私は足が重かった。

いや、足ではない。体だ・・・。いつもと二倍ぐらいに重い。私はとりあえず後ろを振り返ってみる。そこにはレモンが私に抱きついていて、頬擦りをしていた。

私はレモンを振り切って自分の部屋へと駆け込んだ。

ダン！！と扉を強く閉める音が家の中に響いた。

お姉ちゃんの様子がおかしいことは家に入ってきた時の声で大体分かっていた。

だから私が元気になるように抱きついてみたのだが、どうやら逆効果だったようだ。怒らせてしまっている。

それはあのドアの閉め方を見れば一目瞭然・・・お姉ちゃんは怒れば怖い。それはお姉ちゃんが中学校の時喧嘩屋さんだったということもあるのだろうけれども何か別のものに見下されているような気がしてならなかった。

それはお化けかもしれないし、よく言われる守護霊かもしれないのだ。だが、それは絶対に人には見えないものだ。私にももちろん見えるわけがないのだから、そういう予感というものは誰にでもあるものだと思っている。

とにかくお姉ちゃんは怒ると怖いのだが、今日は何かが違っていた。何か思いつめているような・・・その星で怒りがうまく伝わっていないということに本人はあまり気づいていないのかもしれない。とにかく私はお姉ちゃんの部屋の扉の前まで行く。謝りはしないものの、晩御飯がいるかどうかだけはきっちり聞いておかなければならないのだ。

私はおねえちゃんの部屋の前まで来てお姉ちゃんに聞いてみる。

「お姉ちゃん、晩御飯いる？」

・・・

数秒間何も反応がなかった。ドアに耳を付けて音を拾ってみるとスースーと寝息が聞こえてきた。私はずいぶんと疲れたんだなあと思ひ、お姉ちゃんの部屋を後にした。

時間は数十秒前に戻る。

ドアを閉めた後の私は物凄い眠気に誘われた。立っているのがギリギリで気を抜いたらそのまま崩れ落ちてしまうのではないかと思えるほどだった。

私は机に近づき、首にかけていたアクセサリーをはずす。その先っぽにはもちろん赤いクリスタルがついていた。それを確認した後には私はベットに飛びついた。

『ずいぶんとお疲れのようですね。マスター。』

赤竜の声が聞こえてきたがそんなことはもうどうでもよかった。今は襲ってくる眠気の波に乗りたかったのだ。数十秒もしない後に私の意識は布団の中で消えて行った。赤竜はその後黙ってしまったようだ。

残り後二日

目覚ましの音がぴっとなる。だが、私はその前にすでに起きていた。目覚ましの音を止めた後に私は大きな伸びを一つやった。今日は日曜日。学校は休みだった。そして明日は祝日。同じく休みだった。

最後の日まで休みが続くということだが、私はそんな事をとりあえず思考の外へと追い出した。休みの日にあまりこういうことを考えていいことがあるとは思えなかったのだ。

時間は現在7時35分。休みの日には早く起きたほうだが、昨日寝たのが早すぎた。その為に空腹のあまり3時ごろに目を覚ましてしまった（無論夜の）。とりあえず冷蔵庫で寝ていたカレーを

少し暖めてご飯と一緒に食べた。やはりカレーは一日置いたほうがおいしかった。

私は寝巻きを脱ぎ捨てて私服を着た。今日の私服は至って普通の私服。そんな背中に『獄』と力かかれた黒い服など着ない。人生野中北ことがないと言い張れるかと言われればそうでもないが……。私はとりあえず居間に行つて朝食のパンを焼いた。朝はパンに限る。てか、二人はまだ寝ていたしパンの方が楽だからパンにした。とりあえず二人を起こさずに朝食を食べると玄関からそーっと家を出た。

この時期の空は澄んでいた。この日の世界は広がった。

私は玄関に出ると思いつきり伸びをしてそのままの状態で少しの間止まる。そして体制を整えて良しと頷くと一目散に駆け出した。目的地は特に決まっていなかったが、とりあえず走り出した。どこか遠くの世界に行きたかったのだ。

私は楽しくつて笑っていたと思う。

それを見つめる一つの影に彼女は気づいていたのかもしれないし、気づいていなかったかもしれない。

僕は今一人の女性を見つめている。名前は分からない。年も分からない。たぶん自分と同じくらいかもしれない。

僕はとりあえず誰の家かわからない屋根から下りた。彼女を見るには高い所が一番よかったので最初に目に泊まった家の屋根に座つてみていたのだが……。

「彼女が適合者か……。何だ……。弱そうじゃないか……。」  
彼はほかの人が聞いてもほとんど分からないようなことを言っていた。彼は黒い髪をしていたが金色の瞳をしている。人前に出れば目立つこと間違いなしだが、それは困るので人目を避けて歩いている。

彼女が人目が多い所に行くようであれば家などの上を通つて追うつもりだった。だが、彼女が通るのは人目のあまりいないところば

かりだったのでその心配はほとんどなかった。変装用にとハンチング帽を被ってきたがそれもいらなかったのかもしれないと思い直してきた。

だから僕はかなり暇だった。暇で暇でしようがなかった。そこにある人物の顔が浮かんた。それは彼女の妹だった。金色の髪をしていてツインテールな子だったが・・・確か名前はレモンだったな・・・。

彼女をちょっと苛めてやろう・・・そう思った。だが、僕の奇めと言うのはそこらへんの中学生のやることとは一味も二味も違う。刃物を本当に突き刺すのだ。

僕は口元だけ笑いに変えた。そしてハンチング帽を目が見えないくらい深く被ってその場から消えた。否・・・物凄いスピードで上に跳んだのだ。その高さ約10m。彼にはまだ軽い高さだ。そしてそのまま宙をけて彼女の家へと急いだ。

私は目覚ましの音と共に朝起きた。時間は現在7時50分・・・決して早くもないが遅いともいえないあいまいな時間だった。私はとりあえず布団から出て今へと移った。

居間ではカレーを食べた後のお皿とパンを食べた後のお皿の二枚が残っていた。私はうれしくなった。あのお姉ちゃんがこんなに早く機嫌を直すのはすごかった。それにお父さんのカレーを食べてくれたことがうれしかった。

私は上機嫌になりながらお姉ちゃんがどこにいるかを確認した。はじめに玄関の靴を確認した所無かった為たぶん外出していると断定した。たぶん朝の散歩だろう。

私は焼いてもいないパンを口に咥えながら着替えた。着替え終わるころにはパンを食べ終わっていて私はすぐに家を出る。

私も朝の散歩は好きだった。お姉ちゃんと歩くともっとよかった。だから私はおねえちゃんのいつもの散歩コースを走ってお姉ちゃんを追った。食べた後に走ると横っ腹が痛くなるものだが、朝飯が少

なかったために逆にお腹が減ってお腹が痛かった。

私は人通りが余りよくない住宅街に出る。ここは裏住宅街などがあって面白いということでおねえちゃんがコースに選んだ場所だった。私も結構気に入ってたりする。

私は走りながらお姉ちゃんを探すためにまっすぐ前を見ていた。だからなのか横から近づいてくる気配に気づけなかった。

不意に私の左肩に誰か触ったかと思うと裏路地のほうに引きずり込まれた。そこはすぐ後ろが行き止まりで、私の体は速度が乗ったまま背中がその行き止まりの壁と激突した。

結構痛いために目を閉じたがその後また別の痛みが襲った。

私は目を開けて驚きと恐怖に掻き立てられた。右肩の少し首よりの所に刃渡り10cm位のナイフが突き刺さっていた。そこには手が続いていたので私は前を向く。

裏路地のため顔はよく見えないが黄色い目と少し笑った口元だけは見えた。

ナイフの刺さった位置が余りよくないせいかな右腕が思うように動かせない。それに少しでも動かそうとすると痛みが走った。とりあえず壁から離れようとするが、相手の反対の手で左肩を押さえられていたのでうまく動けない。

私は恐怖に耐えながらも左手で左肩につかまっている腕を握った。相手の力はずいぶん強くビクともしなかった。不意にその相手の口が動いた。

「君は悪くないんだ。悪いのは全部君のお姉さん……。君のお姉さんが適合者だったからいけないんだ……。」「

その相手の声は男の子のようだった。だが、適合者だとかよく分からないことを口に出している。それに私は恐怖のあまり思考がパニックっていた。だが、最後にこれだけは言えた。

「あんななんかお姉ちゃんがやつつけるんだ！！あんななんか怖くないんだ！！！」

それだけ言うと相手は沈黙した。何か考え込んでいるような感じ

だった。そして不意に相手の声が冷たくなる。

「そうか・・・なら仕方が無いけれども・・・死んでもらうよ。」

私は大声を出して助けを求めようとした。だが、相手の方を押さえていた手が急に私の口を押さえってくる。その力は強くて、今にもつぶされてしまいそうなほどだった。それと同時にナイフのほうにも力が入ってきた。

「大丈夫さ。君には痛みなんか無い。あるのは絶望と悲しみだけだ。」

その最後の言葉は物凄く優しい響きだった。私はその時恐怖と絶望と悲しみで目から涙を流した。その様子を見て相手は微笑していたように見えた。

ナイフの方に力が加わると私は不意に目をつぶってしまった。そして体を切られる痛みが走る。その時相手の腕の押さえつけはもうどこにも無くてナイフも姿を消している。私はそのままうつぶせの状態に倒れた。

薄れる意識の中ハンチング帽の少年が裏路地から出て行くのが見えた。その出て行く途中でこちらを一度振り返ったが、こちらに来ることは無い。

嘘のように流れる血を見ながら私は眠るように目を閉じていく・・・  
・不思議と痛みは無かった。

私が家に帰ったとき父さんはもう起きていた。父さんはこちらに気づくと笑顔で聞いてくる。

「カレーうまくったか？」

とりあえず私は「寝言は寝て言え」といいながら父さんの前を通り過ぎていった。その後「あちゃー」と言う父さんの声が聞こえてきた。本当は結構おいしかったんだけどなあ・・・とか思いながら冷蔵庫を開けた。

中にはいろんな食事が入っている。だが、私はそこには目を向けずに開いたほうを見る。そこにはたくさん飲み物がある。私は中

から牛乳を選ぶと冷蔵庫を閉めた。棚からコップを出して牛乳を注ぎ込む。牛乳はコップの半分の所まで行くと出なくなった。空になつてしまつたのだらう。

私は牛乳パックをキッチンにおいてコップを持ちながら父さんの居間へとやってきた。ソファに座つて牛乳を一口飲む。

「はあ、おいしい。」

私はコップ半分の牛乳を飲んだ後コップをテーブルの上に置いた。そして父さんに問いかける。

「レモンは起きたのかな？」

「あれ？お前と一緒にじゃなかったのか？もう朝飯食べていったみたぞ？」

父さんは新聞を広げながら言う。私は全く覚えが無かつた。ただ、レモンも朝の散歩が好きだったので自分を追いかけたと言うことはたまにある。たぶん行き違いになつたのだらうと私は思った。

「30分もしたらかえつてくるでしょう。」

「そつだな。」

その後私はコップを片付けて自分の部屋へと戻る。テーブルの上には赤流がおいてあるがどうやらまだ寝ているようだ。クリスタルにも眠ると言う行為があるらしい。

とりあえず私はベットで寝転ぶと漫画を開いた。

2時間ほど経過したときに私は物凄く不安になつた。まだレモンが帰ってきていないのだ。携帯に電話をかけても出ないし、向こうから電話やメールが来ることも無いのだ。

私は父さんと相談した。

「うーん・・・お前がいつも通る散歩コースぞいにいるかもしれないなあ・・・」

私たちはとりあえず家を出て私の散歩コースを走り始めた。はじめは少し自然な感じから始まって、その後人通りの多い道へと出る。その後また人通りの少ない所へと出るのだ。

最後の折り返し地点裏住宅街を通っているときにその異変に気がついた。何か変なにおいがするのだ。この裏住宅街にはもう住んでいる人はいないと言っても過言ではないほどだ。においに気づく人はまずい無いと思う。

私はそのにおいのする方向へと行ってみた。このにおいは血の臭いだと途中で気がつく。その後走ってソレを確認した。ソレがあったのは裏路地のほうだった。私の目の瞳孔が思いっきり開かれる。完全に口は半開きだった。

私はソレに近づいた。間違いなかった。黄色い髪にツインテール・・ソレにツインテールを縛るために買ってあげたリボン・・ソレは間違いなくレモンだった・・・。

「うわああああ!!!」

裏路地に泣き叫ぶ声とも笑い声とも分からない大きな声が響いた。

レモンが手術室に入ってから6時間が経とうとしていた・・・。その間私はずっと手術室近くの椅子に座ってレモンが出てくるのを待った。

私の首にはクリスタルがかけられている。先ほど来た高野に渡されたのだ。もしレモンを襲ったのがティガイスだとしたら私にも来る恐れがある。だそうだ。

私は知らず知らずのうちに爪を噛む。今の私にはレモンを守れなかった後悔や悔しさが入り混じっていた。

やがて数分すると外科医の先生が出てくる。父さんはそれを見ると『レモンは?』と聞き始める。先生は少し渋った顔をして

「手術は成功しました・・・傷が浅かったんです。ただ・・・今夜が峠でしょうね・・・。」

「今夜が・・・。」

父さんは先生の言ったことを復唱するかのようにつぶやいた。私は手術室から別の部屋へと送られるレモンを見た。私はそれを見るだけで心が痛かった。

その後のことはいまいち覚えていなかったが気づいた時にはレモンのそばにいて、レモンの手を握って座っていた。

私はレモンの手を両手で握って祈るような形にした。このときに私が心に決めたことは『もう誰も傷付けさせない』だった。私はテイガイスを倒すための指名を受けたのだ。私の腹は決まった。

私は窓の外へと目をやる。外はもう真っ暗だった。手術でかなり時間が経ってしまったていたようだ。それを確認した後にもう一度レモンの方向を見る。その顔は普通に眠っていると言ってもいいほど綺麗だった。

私はその顔をまじまじと見つめていると、物凄い睡魔に襲われるのだ……。私はその睡魔に対抗しないでそのまま眠ってしまった。その世界は物凄く明るかった。でも真っ白と言うにはちょっと無理がある。どちらかと言えば明るい灰色と言うのが妥当だと思う。とにかく私は前へと歩き出す。

この場所では方向の感覚が全く無い。風も吹いていないし太陽なども無い。寒暖は存在しない。まるで自分の感覚が抜けてしまうような思いだった。

私はハットするとツインテールを触った。そこにはちゃんと黒いリボンがついている。これはお姉ちゃんが私のために買ってくれた大事なリボンなのだ。なくすことがあつてはならない。

とりあえずリボンのことは安心したがここで一つ疑問がわく。

「ここ……。どこ……。？」

一番もつともな質問だ。だが、ここには私以外誰もいない。もちろん返事が帰ってくるわけが無い。私はもう一度周りを見回す。

一人の女の人がいた。短い綺麗な青い色の髪をした女の人だ。いや、年は自分と同じくらいでなんか……。友達みたいな感じがした。とにかく私は彼女の所まで歩いていった。

先ほどからこちらを背にしていたが、近づいてくることに気づくとこちらを振り返ってきた。瞳は綺麗な青色でこちらを微笑むように見つめてくる。私はそれを見ると立ち止まった。

それを見た彼女は私のほうに近づいてきた。走ってきたのではなく、飛んできたのだ。

私はそれを見るとなぜか微笑んだ。そして彼女も微笑んだ。

残り後一日

気づいたとき私はレモンのベットの足元で寝ていた。ちょうど小百合と同じ状態になってしまっているわけだ。

とりあえず時計を見ると時刻は既に10時を回っている。寝ていてよく看護婦さんに怒られなかったものだと思う。私はとりあえず立って背伸びをした。

高野親子には今日返事をするといっている。私はもうどうするかを決めていた。とりあえず私は手元にあったパンを食べる。昨日の晩飯にと父さんが買ってきてくれたのだが、食べる前に私が眠ってしまったために食べる人がいなかった。

パンはメロンパンで結構おいしかった。そういえばレモンもメロンパン好きだったなあ・・・そのわりにレモンが嫌いとか・・・と私はどうでもいいことを思い出す。

とりあえずパンを食べ終わって、私はレモンの表情を伺う。その顔はかわいかった。ただ黙々と眠り続ける白雪姫か何かかと私は思ってしまう。それは少し美化しすぎか・・・。

とりあえず私は近くにあった自分の上着を着て部屋を後にした。否、しようとした。だが、足が途中で止まってしまう。今夜の峠を越えても何かが起こると思ってしまう。もう会えなくなると考えてしまう。

『きつとまた会えるよ。』

レモンの笑顔と共にその声が聞こえてきたと思った。振り返ってレモンの表情を伺うが先ほどと変わりは無かった。笑ってもいなかったし、しゃべれる状態とも思えない。

ただ・・・先ほどの一言は私に大きな力を与えてくれるようだった。

た。私は迷わずに一步を踏み出す。そして病院を出るのだった。

私は家へと向かう最中だった。

病院の位置は家から公園を抜けた先の所だった。つまり、公園を抜けるのが家へと変えるもつともな道と言ふことになるのだ。

この公園はいろんな曰く付だった。私はここで3度も痛い目を見ている。(アフロ不良とデスデビルドックとブラックキャット)そのほかにも子供たちの間でも噂にされていた。

夜12時にこの公園に來るとお化けが出るだとか、かえるを踏み潰すと体長10mを超える親のかえるに踏み殺されるとか、わけの分からないものも多かった。

私はとりあえず近くにあつた赤い自動販売機で飲み物を買ふことにした。その時

『妹さん・・・死んだ・・・?』

その一言が聞こえた。私はえつと驚いて後ろを振り向くが誰もいなかった。確かに聞こえたはずだ。まだ幼い少年の声が。

私はとりあえず360°。全ての方向を見た。

子供連れの母親二組が目に残まつたが、この公園の陰険さを見たのとたんに歸つてしまった。

他には後姿になつてよく見えないがベンチに帽子を被つた人が一人座つていた。そこまで確認すると同時に言葉が聞こえてくる。

『妹さん・・・まだ生きてるよね?・・・傷を浅めにしたんだから死んだら意味無いよね?』

「お前がレモンを傷つけたのか!？」

私は特に誰と言うわけでもないが怒鳴りつけた。向こうからこちらに声が聞こえるならば、こちらから向こうに声が聞こえると思つたからだ。

周りを見回しても不振人物など存在しない。

『僕は人間じゃないよ。簡単に言う』

「ティガイスさ。」

その言葉はすぐ右から聞こえてきた。私は右を向こうとしたが思いつき蹴られて少しの間目をつぶったために相手の姿が見えなかった。かなりの早さだった。

私が次に目を開けたときに入ってきたのは自動販売機。敵の姿はどこにも無かった。

ふと後ろのほうでチャラという音が聞こえてきた。私は後ろを振り返る。そこにはトイレがあつてその屋根の部分にはハンチング帽を被った一人の少年が経っていた。髪は黒で目は金色だった。

その少年の両手には黄色のクリスタルが握られていた。二つとも同じものだ。私は『ダブルタイプ』をはじめてみた。

『解放』

少年のそのそっけないせりふと共に金色にクリスタルが輝く。私は思わず目をつぶってしまった。目を開けたときに少年の手には二つの拳銃があつた。両方とも本体に金色のクリスタルがついていた。

「君は・・・!?」

「僕はティガイスさ。ただ、クリスタルに選ばれ、手に入れてしまったために大きな意志が生まれ、僕を作った。僕は人間ではないのだよ。そしてこれが相棒の蓮草<sup>れんくさ</sup>。」

『全てを破壊しましょう。』

蓮草と呼ばれたクリスタルがしゃべる。私もクリスタルを解放する。

「いくよ!!! 赤竜!!!!」

『はい!!! マスター!!!!!!』

私は赤竜で敵に切りかかる。少年を攻撃するのにためらいなど無かった。妹を傷付けられた仇なのだから。

私の攻撃はあたたった様に見えた。だが、寸前で少年は姿を消した。私の攻撃は空を切る。怒りに任せて思いつき赤竜を振るつたので体制を崩してこけそうになる。

そこで初めて少年が真後ろ2m先にいたことに気がついた。少年は二つの拳銃をこちらに向けて弾丸を放った。赤い弾丸二発がこち

らへと突き進んでくる。私は赤竜を横にして弾丸を防いだ。だがその時前は見えなかった。赤竜をどかして敵のほうを向くと敵はどこにもいなかった。

「こつちこつち。」

先ほどのトイレの上から声が聞こえてくる。私はそちらの方を見て唖然とした。少年がこちらに拳銃を向けたままトイレの上に立っていたのだ。先ほどの場所からトイレの上まで10mくらいあった。それにトイレの高さは3メートルくらいあって飛べる分けない。

「君遅すぎ！それとも本気出してないのかな？」

少年は拳銃を上へと上げた。カチツと言う音と共に拳銃から丸いものが出てきた。少年は片方の拳銃を片方の手に移すと丸いものを二つ片手に乗せた。それをポケットに入れて別の色の丸い玉を取り出した。それをまた拳銃の中へと入れた。

少年は両方の拳銃をこちらに向けてまず右手の弾丸を放つ。ドシヤーという音と共に玉が出てくる。だが、今度の弾丸は先ほどのように丸ではなかった。レーザーやビームのように長細かった。その速度も倍以上だ。

私はとつさに赤竜を構えて相殺しようとしたが弾丸のほうが早すぎた。私は避けると言う選択肢しか残っていない。とつさに変更したために私は体制を崩した。

そこに左手の拳銃から放たれた第二波が来る。私は避けることも相殺することもできずにただその弾丸を見ていた。その弾丸はギリギリで私の横をかすめると変な角度から地面に当たる。そこは柔らかな土の場所だった。

ドバンという音と共に土が爆発した。すぐ傍にいた私もその爆発に巻き込まれて吹き飛んだ。背中をトイレの壁に打ち付ける。一瞬息が止まって痛かった。私はうめき声を上げながら立ち上がるうとした。だが、

「弱いなあ・・・つまないよ君・・・」

少年はすぐ目の前にいた。拳銃は右手だけだったが鼻先数センチ

と言う所で微動だにしていなかった。私はとつさに撃たれると思ったので目をつぶった。そこに何か変な音・・・シュワンという瞬間移動魔法の音が聞こえた。

恐る恐る目を開けると少年の右手を握った女の人がいた。彼女は少年を見ながらつぶやく。

「作戦は半分成功した。帰るよ。」

「ふゝん・・・結構早かったんだね姉さん。」

私が呆然としていると少年がこちらを向いて微笑んだ。その笑顔はティガイスだということを忘れさせるとさえ思ってしまった。

「君。次合う時までになくなっているね。」

それだけ言うと転移魔法でどこかへと移動してしまった。そこへ一人の少年がやってくる。片腕を抑えていたがそこまで症状が悪そうに見えない。彼はこちらに気がつくと思寄ってきて大丈夫と声をかけてきた。

「ええ・・・私は大丈夫だけれども、あいつらはいったい何なの・・・？」

その問いかけに彼・・・高野は重く口を開いた。

「クリスタルを持ったティガイスが現れたんだ・・・二人ともたぶん危険度はトリプルAを超えるだろう。」

最後にその場に残ったのは啞然とする私と少し落ち込んだ高野だけだった。

沈黙だけが――過ぎていった――

#### 第四話 魔剣ティガイスと赤い閃光

私はあの金色のクリスタルを使う少年と戦ってから戦艦アスカへと移動魔法で飛ばされた。すでにレモンの隣に『少しの間家を出る』と手紙を残してきたので問題はない。

アスカの中に入るとそこはやはり長細いろうかだった。私はとりあえずレイラさんに挨拶しようと思う。

『緊張しますねマスター。』

「うん。」

私は扉の前までやってきた。私は小さな深呼吸を一つすると、ドアを勢いよく開けた。だが、中の光景を見て私は啞然とした。

あの高野がレイラさんの膝で寝転んで耳掃除をしてもらっていた。私は勢いよくドアを閉めた。ドガンという大きな音と共に目の前はドアと化した。

私は次に大きな深呼吸を二回ほどし、また勢いよくドアを開けた。ズズズという音と共にレイラさんはソファアに座って紅茶を飲んでいた。高野はその反対側のソファアに座って自分で耳掃除をやっていた。私はその光景に安堵した。

とりあえずレイラさんはこちらに気づくと微笑みながらソファアを一つ指差した。そこに座ってもいいと言うことなのだろう。私はお言葉に甘えて指差されたソファアに座った。

レイラさんは高野を見ると高野は何かを察したように立ち上がって別のテーブルにおいてあった紅茶を、余ったコップに注いで同じ柄のお皿の上に置いた。それを私の目の前において高野は先ほどと同じ所に座った。

レイラさんはその工程を見て終わったと感じると、私のほうを向いてきた。

「3日ぶりね。確か・・・ギンさん・・・でしたっけ？」

レイラさんは真剣な表情だった。私は息を飲んだ。

「はい。私は身近にいる人を守りたいと思ったから着ました。」

「身近な人ねえ？」

レイラさんと高野はくつくくと控えめな笑いをした。私にはその笑いの本当の意味を知らなかったが……。

「とりあえずこの戦艦に住むことになるんだけれども……宗次。部屋の案内をしてあげなさい。」

「はい。」

高野は私について来てと言うと私が入ってきた所から出た。私はそれについていった。

廊下に出ると高野は止まらずに歩き続けた。高野が目指したのはレイラさんの部屋とは反対の扉へといっている様だ。私はただそれについていくだけだ。

その反対側の扉を開くとそこは広い展望台だった。私から見て左側には大きなガラスが張られている。そこから宇宙が見えた。右側には椅子や机がたくさんある。さらにその横にはいろんな食べ物があり並んでいた。

「食べ物が発売されたもので、機械の中で自動的に作ってくれるからいいんだよ。味付けも好きなようにできるしね。」

そういつと高野はすぐ右側にあった鉄の扉を開いた。そこは階段のようだ。高野は上の階へ徒歩を進めた。

やがて扉が見えてくる。高野は何もしないでただその扉を開ける。そこは物凄く長い廊下だった。所々に扉がついていてそこがどうやら宿舎のようだった。

高野はどんどん歩き出す。やがて一つの扉の前で立ち止まった。その部屋の番号は2038号室……プレートには私の名前が書いてあった。

「ここが君の部屋。えっと……他にもう一人いるんだけど……。」

と言っているのに気づかなかった私は不用意にもその部屋のドアをノックもなしに開けてしまった。

そこは広い部屋だった。そしてその中央では下着姿の少女が一人・  
・片手に服を持っているところから見ると着替え中だったようだ。  
私の後ろからゲツと言う声が聞こえた。それは紛れもなく高野が出  
した声だ。

高野は『男』なのだ。少女が見られたとしても普通そこまで痛い  
攻撃はされないだろう。『普通』ならば。

彼女は近くの机に置いてあった宝石を手を持った。それは紛れも  
ないクリスタルだ。色は黒めの青。彼女は少し下を向いているよう  
でその長い髪で顔が見えない。何か知っている人物のようだった。

「・・・サンハート・・・行くよ・・・。」

『了解です。マスター。』

そのサンハートと名付けられたクリスタルは明るい女の子の声だ  
った。だが、高野はそんなことを気にしている余裕は無かった。一  
歩一歩後ろへ下がるが、ここの廊下の幅はそんなに無かった。すぐ  
に後ろについてしまう。

「解放」

その一言とともに光が走る。それがやむ頃には少女の左手に本が  
あり、何ページ目かを開いていた。そして右手はこちらにしっかりと  
伸ばし、人差し指だけを高野に向けて伸ばしていた。その指の5  
cmほど先の所に白い玉ができて始めている。

「ま・・・まで！！やったのは俺じゃな・・・！！！！」

「・・・問答・・・無用・・・」

彼女はそっけなく答える。それが逆に怖かった。私は恐怖に駆り  
立てられて手前に引かれたドアに隠れた。

『レイ』

彼女のはなったその一言で回りは光に包まれた。私には何がどう  
なっていたか見えなかったが、気づいた時には高野がうつぶせの状  
態で倒れていた。心なしか煙が出ているようにも見える。

私はドアからそーっと彼女のほうを見た。彼女は既に服を着始め  
ていた。やがて服を着終えるとこちらをまっすぐに見てきた。

「・・・ギン・・・もう入って・・・きてもいいよ・・・。」  
私は絶句した。その女の人は小百合ちゃんだった。

その少し暗い部屋の中に三人の人物がいた。

一人は髪の長い女の人。一人は髪の短く背の低い少年。一人は随分しっかりした体つきの青年の三人だった。

部屋の中はどこかの施設のようで生活用品が一式全てそろっている。だが、新品同様で使った形跡がない。電気も天上についているのにつけなかった。

だが、その光景とは不似合いな三つのものが置かれていた。

それは卵の形をした透明なガラスのはめられたものだった。その土台部分は完全な機械と化している。

男はその中の一つを蹴った。その部屋の中にドンという大きな音が響く。

「兄さん・・・そんなことしたら・・・」

「この卵のせいで俺らは大変な目にあったんだ。」

「でも、私達はそのときのことがあったってこの世界を手に入れることができるようになった。」

三人はわけの分からない話をした。

「でもレイン。お前なんであの女のクリスタルを奪わなかったんだ？あの状態なら奪えただろうに・・・。」

男は少年のほうを向きながら聞いてくる。暗闇で見にくいとその表情には疑問の節が当てはまった。

「あの女には面白いものを感じたんだ。だからクリスタルをそのままにしたんだ。だって簡単に終わったらつまらないだろ？」

「そうだな。」

作戦決行の日は——近い——

あの部屋で小百合に出会ってから何日か過ぎていった。何でも小百合はかなり前から適合者だったらしい。そして私が適合者だと言

うこともデスデビルドックの時に知っていたと言っ。

だが、私は何も知らなかったのだ。それについては唇を噛むしかなかった。

アレから数日がたってようやくこの暮らし方に慣れてきた。初めの頃はやり方は他の乗組員達に教わっていたが、今ではもう一人でできるようになっている。そして一番問題なのが、昼ごはんだった。

ヘルシーな料理から殺風景な変わった料理まで約100種類ほど機械で作れるそう。どれもおいしくていい。ただ、問題はここからだ。まずは値段。もちろん材料費などもあつて取られるわけだが、自腹だ。それに結構高い。

そして次に変なものまで用意されていると言うことだ。『タバスコ入りシチュー』はその代表の一人だ。そのほかに『からし入り豚汁』や『わさび入り卵ぶっかけ丼』だとか・・・一番それについての問題が案外おいしいことだ。味覚がおかしくなったのではないかと思えるほどだった。結構人気らしい。

そんなことはどうでもいい。アレから数日たった現在まで仕事は一切無かったが、この日初めての仕事が始まり込んで来た。

仕事の内容はある山の中で発見されたティガイとクリスタルの反応の調査だった。まず練習にと私だけでなく小百合ちゃんも付き添うことになった。私は転送機に乗る前から緊張していた。だから神にでも何でもすがろうかと思えた。

だが不意に小百合が口を開いた。

「・・・すぐるべきは神ではなく・・・人の良心である・・・」

いきなりの発言に私は少し呆然となった。そして私は今まで思ったことがばかしく思えてきた。だから私は笑った。他の人がその光景を呆然と見ている中でも大きく口を開けて笑った。小百合だけがその光景を見て微笑んでいた。

「・・・これ幻三つて人の・・・言葉何だけど・・・」

「そうだね。緊張ほぐれたよ。ありがと小百合。」

そこでまた微笑むと同時に私の視界は白へと代わっていく。転送機が発動したのだった。

私の転送が終わり目をゆっくりと開けるとそこは森の中だった。360度くるつと回ってみるが景色の違いなどそう分らなかった。完全な森である。小百合も近くに見えない。

とにかく止まっているだけでは何もできない。私は小百合の名前を叫びながら森の一方方向を歩いた。

私はよく分からない森の中を走った。

見覚えのない森だった。だが、走るしかない。だって後ろから異様なものが接近してくる。アレに捕まれば殺されることは間違いなかった。

だから私は逃げた。その両手に抱えているものを捨てようとは思わなかった。その青いものに何が入っているか綿は知っていた。だが、それを使おうとも思わなかった。ただただ私は逃げている。

途中森の木の根に何度も躓いた為に服はドロがたくさんついている。それに木によく擦っていたために所々服に傷がついていた。そして木の大きな根に気がつくのに遅れた。私はそれに躓き派手に転んだ。

そしてその先にはツタが多かった。私に少し巻きついてしまった。私はそれを取ろうとするが手が震えてうまく解けない。

不意にガサツと言う音が聞こえた。前を向くとそこには犬の形をした化け物がいる。それも1匹ではない3匹もいた。グルグルルルといているその犬を私は恐怖の目で見つめている。瞳から涙があふれてきた。

ワウオンという声とともに犬が飛び掛ってきた。私はついに目を閉じてしまった。だが、痛みは何も襲ってこない。キャウンと言う声が聞こえたので私はゆっくりと目を開けた。

そこには大きな剣を持った一人の少女だけが立っていた。そして

その少女の目の前では異形な犬が3匹横たわっていた。その大剣を持った少女はこちらを向いてきた。私は一瞬ビクツと怯えたが、その少女が笑顔を向けていることに気づくと落ち着いた。そこで私の意識が無くなった。

時間は少し前に戻る。

私は知らない森の中をさまよった。

『・・・ギン・・・？・・・聞こえる・・・？』

それは小百合の声だった。

『そうか・・・適合者同士で会話できるんだだけ？』

『・・・うん・・・。・・・私・・・別の仕事・・・入っちゃった・・・。』

『あゝうん。つまりこっちの仕事にこれなくなったからよろしくねってことだね？』

『・・・うん・・・。・・・よろしく・・・。』

そこで通信が切れた。私は周りを見渡した。とにかくこの森を出る必要がある。私はとにかく一つの方向を歩き進める。そうすれば森以外のどこかに出るはずだった。だから私は歩き続けた。

その時——ガルルルと言う声が聞こえる。かなり近かった。私はその方向へ走った。その方向には三匹の犬がいた。忘れるはずもないそれは『デビルドック』だった。

デビルドックは三匹ともただ一点を見ていた。その先にはツタに身を預けるように一人の少女がいた。

ワウオンという声とともにデビルドックが少女に襲い掛かる。私はすぐに解放してデビルドックと少女の間に割ってはいいる。

一匹目のデビルドックは一気に縦から一刀両断した。

二匹目は右から横に飛んできた縦に切った後の赤竜を横にして横に斬った。

三匹目は左から襲ってくる。二匹目を斬った反動で回転しながら三匹目も切り伏せる。それで終わりだ。

私は少女のほうを振り向く。少女は瞳孔の開いた目でこちらを見ていた。目からは涙があふれている。私はとりあえずどうして言い分からずに微笑んだ。

少女はそれを見ると静かに目を閉じていった。私は驚いて少女に近づいた。

少女は息をしていた。だが、弱弱しく呼吸も荒い。衰弱していた。私は少女を抱きかかえる。

とりあえず安静にしないといけない。とりあえず私は安静にできる場所を探した。何でもいい。村でも良いしとにかく私は森の中を走り回った。

ゼイゼイ言いながら私は崖の上に立った。その下には村が見えた。私はとりあえずその急な崖を降りた。

降り終わる頃には私の体力は0に近かった。とりあえず私は病院を探す。こういう小さい村には診療所の一つくらいあるものと踏んで探した。はたしてあった。私はその病院に駆け込む。

否、病院ではない。診療所だ。とりあえず少女を医者に渡して診断してもらう。

特に問題はないそうだが衰弱が激しく、傷も多いそうだ。少しの間病院のほうで預からせてもらうと言う返答が聞こえた。こちらとしても預かってもらうと助かる。いや、嫌な意味ではない。

とりあえず私は診療所を出た。走りつかれてしまって私は大きなあくびを一つした。近くに宿があったので私はそこで眠ることにした。だが、一つ気になることがあった。

あの少女の持っていた袋の中身・・・アレは間違いなく・・・。だが、その袋もあの診療所の人たちに渡してきてしまった。

とりあえず私はゆっくりと眠ることにした。時間は決して早いとはいえない。もう夕暮れだった。今寝ればぐっすり眠れること間違いないだろう。とりあえず私は部屋を一部屋借りてそこで眠った。

夜私は妙な物音で起きてしまった。どうやらやっている途中で寝

てしまったようだ。

私はあくびをかみ締めながら椅子から立ち上がる。先ほどまで見ていたカルテが机で少し散らばっていた。私はそれを片付ける。その時またコトつという物音がした。

今日は私しか残業者がいないのでこの診療所内で物音がするのはおかしかった。私はとりあえず音のした方向に歩を進めてみた。その部屋は今日つれてこられた少女の部屋だった。

その部屋の扉を開けると中には誰もいなかった。少女もだ。私は驚いて周りを見回した。

おかしい所はどこにもない。私の頭の中に一つの長細い袋が思い浮かんだ。あの袋の中身は口が堅く閉められていて中が見えなかったが触れば大体の中身は分かった。

あの少女はあの袋を取りに行ったかもしれない。私はその袋を置いておいた一つの部屋へと向かった。

誰もいない廊下に自分の足跡だけがコツコツと響いていた。

私は一つの部屋の目の前で立ち止まる。そこには『待合室』と書かれていた。あの袋はここに置かれていたのだ。私がドアに手をかけようとする中からコトつと言う音がまた聞こえた。

私は勇気を出してその部屋のドアを開けた。ガチャリと言う乾いた音とともに待合室が見えた。

そこには椅子が多く立ち並んでその先には机が並んでいた。そこに一人の少女が立っていた。見間違うはずもない。それはあの部屋にいた少女だった。

そしてこつちを見るや否やニヤリと笑ったようにも見えた。そして手元の何かがギラリと輝いた。それが刃物だと気づいた頃私は地面に逆さになっていた……。首だけの状態で……。

最後に見たのは少女の手元に光る血だらけの刀だった……。

私は一人の男性の大声で起きた。なんか人が殺されたとか火事だとか聞いたような気がする……。

とりあえず布団から出た。とりあえず窓を開けて外の様子を見た。外はまだ暗闇でどうやら朝は空けていない。だが、そのはずだった。時計を見てもまだ天辺を指していた。だが、外は暗くなかった。

「赤色に近い・・・朱色・・・？」

一辺の空が赤く染まっていた。ほんとに火事のようなのだ。しかもかなり大きい。私はとりあえず宿屋を出ることにした。目的地はたぶん市街地だろう。

私が市街地についたとき、そこは火の海と化していた。人々が行きかう中消火活動が遅れていた。あまりにも火の回りが速すぎるのだった。その為野次馬の半分ほどが火事を目にしながら何もできずに呆然としているだけだった。

私はその中に診療所があることに気がつくとも漠然とした。だが、その視界端っこ森のほうに緑っぽい髪が見えたような気がした。あの少女の髪も緑色だった。

私は目を二、三度瞬きさせながらその森のほうへと走っていった。3分ほどすると回りは全て森の中と化していた。どこを向いてもほとんど同じようにしか見えない。私は少女の姿を探すが姿はおろか髪すらも見えなかった。

「ねえ・・・？お姉ちゃん・・・？」

突然森の中で一つの声が響いた。もちろん聞き覚えはない。ただ、声が高くてか細いと言うことしか分からない。

私はとりあえず構えた。何があってもいいように。

「誰・・・！？」

「ふっふっふ・・・。」

その声の最後に風を切る音が聞こえた。私は反射的に首を右側へと傾ける。それと同時に左頬に傷が生まれた。私ははつとして後ろを振り向いた。そこにはあの少女が刀を持って立っていた。

その刀は血に染まっついていて赤色へと変色していたが、それが元の色だったかのように似合っていた。不意に赤竜が話しかける。

『マスター。あの刀からテイガイスとクリスタルの反応が見えます。

』  
「えっ!?!」

私はその少女の持っている刀をよく見てみた。柄の部分には黒い色のクリスタルがついていた。そういえば刀身も少し黒い霧のようなもので覆われている。つまり彼女は刀に操られているのだ。

少女の目は虚ろで焦点があっていない。片手に刀を携えているその少女が急にその刀を振り上げる。そして真っ直ぐ縦に振り下ろした。そこから風のようなものが流れ私の服の肩の部分を少し切った。私はその光景を見て驚いた。

少女はその光景を見て笑っていた。ここで彼女を攻撃していいものか考えてしまう。

『真剣に戦わないと死んじゃうよ? くくく・・・』

『マスター!! 刀さえ壊れればあの子も戻るはずです!! 私を・・・使ってください!!』

私は唇を噛んだ。どうするべきか迷ってしまったのだ。だが、無常にも少女の刀がまた振り上がった。そして刀を振ると同時に風がかまいたちとなって私を切り刻みに来る。

私は唇を強く噛みすぎて血が唇から流れてきた。私はクリスタルをきつく握りそしてつぶやいた。

「解放・・・」

襲い掛かる鋭い風が私に直進する。だが、寸前にその赤竜で風を起こして風の軌道を変えたおかげで私への直撃は無かった。しかし、私からそれた風は周りの木々を切り裂いていった。

私は舌打ちしながら赤竜閃を放つ。少女はその竜を刀一閃でかき消した。

私は少し戸惑った。この技があまり通用しないと使用する技がほとんどなくなってしまうのだ。これは困ったことになったと思い少し考えることにする。

だが、少女は無常にも待つ気はないらしい。その時突然彼女の影

がぶれ始めた。そして急に姿が消えてしまったのだ。

私は目を瞬かせた。だが、耳元で『あなたは私のスピードについてこられるの?』と囁く声がした。私は驚いて声のしたほうを振り向いた。だが、そこには誰もおらずただ森が続いていた。彼女は遊んでいるのだ。

突然左の肩に冷たい感触が走った。傷は浅くそんなに血は出ていないが今回は風ではなく、普通に斬られたようだった。移動速度が物凄いのだ。私に追いつけるわけがない。

不意に赤竜が喋りかけてきた。

『マスター。俊足赤竜双しゅんそくせきりゅうそうを使ってみてはいかがですか?』

その名前は聞いたことが無かった。知らないと言おうとした所でなぜか変に思う。私はその技を知っているような物凄くへんな感覚だった。とりあえず私は技名を復唱した。

「俊足赤竜双!」

そう唱えただけで私の周りに赤い霧のようなオーラのようなものをまとった。それは不快感も無く私をただ優しく包み込んでいた。私はゆっくりと目を閉じる。

そして目を開ける。先ほどとは違う感じがする。そして急に後ろから切りかかってくる少女に気がついた。すぐに振り返ってその反動で敵を切りつける。それは少女の斬りと重なり、鈍い音とともに動かなくなった。

少女は驚いていたがすぐに顔色を変えて押しにかかってくる。それに負けると斬られるので私は踏ん張った。キンと言う音がした後、2人は反対方向にすっ飛ぶ。私は足でそれを支えた。

少女は少し笑ってすぐにまた消えてしまった。だが、私にはその速度が遅いようにも見えた。

私は地面をいっぱい蹴って前に一直線に進む。20mを一瞬で走りきる。すぐ右側には少女がいた。少女がこちらを見て驚くがすぐに真剣な表情となつて後ろにターンする。

私もそれに続いて逆にターンをする。少女はそこを狙って刀で切

り込んでくる。私も背気流を振り回してそれを防いだ。

そこでいったん少女の動きが止まった。刀を変わった動きにさせてこちらに勢いよく振ってきた。それと同時に風が襲い掛かってくるが、先ほどよりもスピードは2倍に早かった。私はそれを避けるが、その避けたかまいたちがこちらにブーメランのように戻ってくる。私はそれを赤竜で切り裂く。それでそのかまいたちは無くなった。だが、そこに少女の斬撃が襲ってくる。赤竜を振った後の私は隙が多い・・・それを狙ってきたのだ。

私は足だけを頼りに思いっきり地面を蹴った。それで少女の攻撃は簡単に避けられたがブレーキが追いつかなかった。その為木に背中を思いっきりぶつけてしまった。一瞬息が止まり、私は少し咳き込んだ。

その間に少女は一気に私の目の前に近寄ってきた。そして刀を振るう。私はそれで切られるはずだった。だが、その時

『レイ』

と言う言葉とともに光の矢が何本も少女に当たるところだった。だが、少女は刀をふるって光の矢を相殺した。少女は光の矢を放った人物を見た。そこには小百合が立っていた。

「さ・・・小百合・・・？」

少女は小百合のほうを見据えると体の向きを小百合のほうに向けてそして間をおかずに一気に距離をちじめる。そのまま小百合に切りかかった。小百合は本の何ページ目かを開いて左手に持ちそして言葉を唱えた。

『ジャンプ』

そう唱えると上空に高く飛んだ。その距離15m。それを一瞬にして飛んだのだ。

少女も屈んで一気にジャンプする。速度は小百合のジャンプより遅かったが十分15mに届いていた。暗い闇の中に二つの人をしたものが浮かんでいた。遠くの空が赤かった。

私は変わった少女と対峙していた。この少女は刀に操られていると言う。危険度的にはダブルA程度かAだろう。つまりダブルA - ぐらいだと思える。

とにかく私は別の魔法を唱える。『フライフェザー』と唱えた。そのとたんに背中に真つ白な羽が生えた。私はその羽で空を漂いながら敵の出方を見ている。少女もどんな力か分からないが空飛んでいた。

私が少女を指差してレイと唱えた。それと同時に指先に光が集まりそれから何本も矢が発射される。それが少女にめがけて飛んでいく。だが、少女はそれを簡単に避けてしまう。

そして刀をこちらに真つ直ぐ用意してこちらにダッシュして来るそのままこちらに突き刺さりそんな勢いだった。私はそれをギリギリの所で横に避ける。

だが、その少しのところで少女の『何か』によって吹き飛ばされた。そして私はギンと同じく木に背中をぶつけた。物凄く痛みを伴った。その『何か』が魔法であることにやっと気づいた。

少女は私が吹き飛ばされたのを見ると面白くなさそうにちつと舌打ちしてギンのほうを向き直した。そのままギンのほうに飛び込んできた。そして刀を振り上げる。

私は最後の力を振り絞ってレイをとねえた。その攻撃の先にあるのはもちろん少女だ。

レイの光の矢は真つ直ぐ曲がらずに少女のほうに向かっていった。少女はそれをはじき返す。その中の一本の矢が私のほうに向かってくる。私は不意に目をつぶってしまった。自分の魔法で死ぬのかと思った。

ガツという音とともに私は目を開けた。その時私の目は大きく開かれていた。目の前にはレイの光の矢を片手につかんで私に飛んでいくのを防いでいるギンの姿が映った。そのレイを持った手から血がほとばしる。

私は握っていたレイをさらに強く握る。ブシュと言う不快な音とともに自分の血があふれ出してくる。その血が自分の顔についた。私の顔半分は赤く染まっている。それに体全体も赤色に染まっている。こちらは自分の技だ。

その握っていたレイをもう一度少女のほうに投げる。少女はそれを軽々と握る。だが、ズブアという音がしてレイが手から滑り落ちたように後ろの木へと刺さる。少女は目をしばたかせた。驚いているのだ。

私は顔を上げた。私は気づかなかったが何故か少女が驚いていた。私は自分で異変に気づいていた。自分の瞳の色が変わっていたのだ。それは下にあった水溜りを見れば分かった。

黒いはずの瞳が金色へと変化していたのだ。それに目つきも中学時代の時へと変貌している。私は特に気に留めなかった。その瞳で少女を見据えて、一気に距離をつめた。

そしてその大剣を少女に振るう。少女は苦い顔をしてその斬りをジャンプして避ける。たぶん危なかったのだろう少女の顔はすごい驚いていた。

少女は空中へと逃げる。私は剣を左から右へと綺麗に振るう。その軌道は真つ赤だった。

れんりゅうせきりゅうせん  
『連龍赤竜閃』

そう唱える。それと同時にその赤い軌道上から赤竜閃の竜が5匹くらい少女に向かって飛んでいった。回り込むように飛んでいくために逃げ道などないに等しい。少女はその攻撃の全てをほとんど直撃で食らった。

上がった煙が引いていくと少女の姿が見えてきた。その少女の着ていた服がほとんど燃えていた。そしてその刀を両手に持ち替え上段に構える。最後の勝負を仕掛けるつもりらしい。

私も両手で赤竜を持って一気に突っ込む。少女も一気に突っ込んできた。赤と黒の閃光が半分ずつ煌いた。そして光がやんだときそれぞれは先ほどとは別の場所に・・・反対側にいた。

私はその時意識をなくして下に落ちていった。だが、空中で小百合がフライで飛んで私をキャッチしてくれる。

「・・・大丈夫・・・？・・・ギン・・・。」

「うん・・・。」

私は力弱く返答した。少し目を開ける。目の色はもう戻っているようで小百合はそうたいして驚いてはいなかった。だが、小百合は少女のほうを見ながらまだ警戒していた。私はため息を一つついた。それと同時に赤竜はクリスタルに戻る。

「勝負はついたよ・・・。」

少女は終わった後から一步も動いてはいなかった。だが、最後に私がその言葉を言ったと同時にバゴンとその刀は折れてしまった。そして最後に残ったのは落下する少女とその少女が握っている黒いクリスタルだけだった。

小百合は私を地上の森の中で横たわらせるとまた飛んでその少女を空中で捕まえる。

少女は静かな寝息を立てて寝ている。片手には刀身の消滅した刀を握っていった。小百合はその刀についているクリスタルをもぎ取るとポケットの中に入れる。

「・・・ミッション・・・コンプリート・・・。」

私はそれを見て安堵のためか意識が薄れ始めていた。小百合が地上に足が着くのと同時に私の意識は完全に無くなり寝息を立てて寝てしまった。それに気がついたのはそれから2日後の部屋でのベッドの中だった。

私が地上に降りたときギンの目がふさがっているのに気づいた。心配して近寄ってみたがスースーと寝息を立てているのが聞こえた。たぶん精神力の使いすぎで疲れたのだと思う。私は安堵した。

私は抱きかかえている少女をまず見てみる。

刀は消滅してしまっている。少女の傷は少し浅くて大きな傷はない。アス力に預けておけばいいだろうと思う。

私は別の仕事が入ったが、そのティガイスとクリスタルの反応は完全なデマだった。だから戻ってきてみたところ、銀河少女に襲われていたのだ。とりあえず助太刀に入ったが……。

珍しく『当たり』だった。これは相当低い確立なのだ。

『そっちはどう？』

レイラさんの声が耳元に響いた。先ほどから付けている小型のイヤホンが耳にある。そこから声がするのだ。

襟元にはマイクがついていて、それで会話ができるのだ。

『……クリスタル……回収……。』

そういうとレイラさんは少し喜んだ。すぐに近くにいたと思われる高野にせいされたようだ。

レイラさんは咳払いを一つして、転送するよと言ったのを私は聞こえた。それと同時に視界が白に変わっていく。気づいた時に私はアスカの転送機の中に立っていた。

私が起きた時、わたしはアスカの戦艦内の自分の部屋にいた。それもベットの途中で寝ていた。

上半身を起こすが頭に痛みが走る。反射的に頭に手を当てるがそれで直るとは到底思えない。だが、私はとりあえずベットから起き上がり近くにおいておいた赤竜を手にした。

とりあえずドアを開けて廊下に出る。そこには涼しい冷房がかかっている。気持ちよかった。

私はとりあえず何処と言うわけではないが歩き出した。この前の技の精神力使用が大きすぎてまだ本調子ではない。少し頭がくらくらするし……私は壁にもたれかかった。

とりあえず私は展望台へと急いだ。基本的に展望台が作戦会議室やらとなっている。レイラさんの一言でそこが司令室になるのだ。だから私はそこに急いだ。

鉄のドアを開けるとそこにはいつもの展望ではなく司令室になっていた。

この場合の司令室とは完全にそうなってしまうのだ。展望台のい  
つも宇宙が見えるガラスにはいろいろな記号が書かれていた。他に  
は映像が流れていた。

司令室の端の一番目立つ所にレイラさんが少し大きめの椅子に座  
っていた。そしてこちらに気づくとイスから立ってこちらに近づい  
てきた。そして私の目の前まで来るとガラスの映像の一つを指差し  
た。

そして反対の手で指を鳴らした。

パチンと乾いた音がその司令室に響き渡る。それと同時にその映  
像が動き出した。

そこにはバックが白で一人の青年が立っていた。

青年は金髪で23くらいの若い人だ。そして黄色い目をしていた。  
その青年は次のように語っていた。

『やあ。適合者そしてクリスタルに選ばれなかった諸君。私たちは  
クリスタルで世界を征服しようかと思う。君たちに果たしてそれを  
止められるのかな・・・？』

今私は3つのクリスタルを用意してみた。君たちはそれを手に入  
れることができるのかな・・・？ふふふ・・・。

では、健闘を祈るよ。』

映像はそこで終わっていた。少しの間戦艦の中で沈黙が走った。

彼の計画の意味が全く理解できないのだ。

不意にレイラさんが口を開いた。

「小百合ちゃんと宗次にはそれぞれ出てもらっているからあなたも  
別の所に行ってくれろ？」

私は頷く。そして私は後ろに回って転送機に走った。

転送機に乗って合図をすると私の視界は白へと変わる。気づいた  
とき私は戦艦アスカから消えていた。

いよいよ——始まるのだ——

歴史的な——戦いが——

## 第五話 来戦

その真つ暗な部屋のベットで二人の少年少女が横たわっていた。少女の年は10歳くらいの少女だ。なので今はレインと一緒に寝ていた。中ではレインが一番歳が近いのだ。

髪の長い女は少女を起こさずにレインだけを起こした。だが、一緒にその少女も起きてしまったのだ。

「どこか行くの・・・？」

まだ時間は昼少し過ぎ・・・お昼を食べた後のお昼寝をさせていたのだが・・・

女はとりあえず「散歩に・・・」とだけ言っただけでレインという少年と共にその部屋を出た。

最後に残ったのは「気をつけてね」と言っただけのひとりの少女だけが残っていた。その光景を青年は見つめていた・・・。

僕の転送された先は街の中だった。周りにはビルなどが多く立ち上っている。このような所でティガイスが出れば大問題である。僕は少し歯噛みした。

とりあえず周りを見渡すがティガイスの反応は何も無かった。僕はとりあえず安堵して胸をなでおろす。

多くの人々が行きかっているが、知った顔は一つもない。それに言語も日本語ではないようだった。

不意に背景が灰色に変わった。ビルも人も何もかもである。僕は周りを見渡すが完全に全体が灰色になっていた。僕はこの状態が何か知っている。

頭の中に『封印』と言う二文字がグルグルと回っているがそれを考えているうちに一つの声が響いた。

『あつはつはつはつは！！』

「誰だ！？」

そこまで言ってやっとなげく。

この封印の中では封印を張った者と精神力の高い者しか入れないのである。他には精神力の高い人がいるようには見えなかった。と言ふことはこの声の主が封印を張ったのだ。

僕はとりあえず声がしたと思われるほうを向く。そこにはビルしか建っていないが、一番近くに合ったビルのでっぺんを見てみるとそこには髪の毛の長い金髪の女の人が立っていた。

服とズボンで普通の私服を着ているが、ティガイスであると判断した。なぜなら……

「久しぶりだな……クリン……？」

『ええ……。あの日以来かしら……。うれしかったわ……。』

「その誤解を招くようなへんな言い方をするな！！僕は前と出合えてうれしいなんて思えないぞ！？」

『あつはつはつは。』

クリンの笑い声が響いた。彼女は自分のズボンのポケットに右手を突っ込むとすぐに何かを取り出した。それは少し青い緑色のクリスタルだった。

彼女は少し笑いながら『解放』と唱える。その途端に光が満ち溢れた。僕は不意に目を閉じた。すぐに目を開けたとき手には杖を持つていた。杖は黄色く先のほうが少し曲がっていてそこには針がたくさん付いている。

僕はそれを見ると肩からかけているクリスタルを手にとった。

「いくよ翼天……！！」

『はいマスター。』

「解放！！」

それを言つとよく点の形が見る見るうちに変わって行ったそれは槍となり敵を切り裂く一陣となった。僕はそれを持ち敵を威嚇するために構える。それを見たクリンは完全に笑った。

次に杖の先をこちらに向けてきた。その先に白い玉ができています。その見慣れた魔法を見て僕は思った。そういえばクリンは魔法使い

だったなあ・・・と。

『レイ』と言うクリンという声がするとその白い玉から光の矢が降り注いだ。僕は唇をかねて対決の始まりを予感した。

てんじょうはつうは  
「天上防空波！！」

そついうと目の前に青い盾が出てきた。レイはその盾にあたるとひとりでに爆発する。レイの発射が終わると同時に僕は盾を消した。そのままクリンに攻撃しかける。

翼天でクリンを切ったがそれは影となり簡単にかわされてしまった。僕が悔しがってビルの頂上にいると真横から声がしてきた。

「まだまだだね・・・ボウヤ・・・。」

「僕は・・・ボウヤじゃない！！」

僕は右を向きながらいきなり切りかかる。だが、それも外れて僕の体制が崩れただけだった。『エクスプロージョン』と後ろから声がした。それと同時にビルが爆発した。爆発系の魔法だ。

僕はその爆発に巻き込まれて吹き飛んだ。背中をビルに思いつきりぶつけた。そこは窓で中に突っ込んでしまう。パリンという割れた音が響いた。まだ終わってはいない・・・。

私が転送された所は何もないただの草原だった。よく見れば山が薄く見える。とりあえず外国だろうか・・・？モンゴルか何かだろう。草原の草は少し長めに伸びている。

私はとりあえずため息をついた。そこに声がかかった。

『なーんだ。僕の相手はこの前のあの人じゃないのか・・・』

その幼い声は少し残念そうに語っていた。私は後ろを振り返るとそこにはハンチング帽子を被った金色の瞳をした少年が立っていた。その少年の手には二つの金色のクリスタルが握られていた。

『解放』

金色の光とともに少年の手には二発の拳銃が握られていた。その二つの拳銃の銃口はこちらに向いていた。少年は少し微笑んでこちらをじっと見つめてくる。

私はギュツとサンハートを握った。そして『解放』とつぶやくと光とともにクリスタルが本と代わっていった。本の表紙には黒めの青いクリスタルがはまっている。

「・・・あなた誰・・・？」

私は好きの内容に構えながら名前を尋ねた。その少年は先ほどから微笑んでばかりで何もしていない。ただ、それでも銃口をこちらに向けている所がすごい。

少年は微笑んだ口を少し普通の無口状態に戻して答えた。

「あははは。僕・・・？僕はレイン。この蓮草れんぐさと共にこの場所に存在してるんだ。うれしいよ。」

「・・・蓮草・・・？・・・クリスタル名・・・か・・・。」

私はとりあえず思考を働かせる。この少年からはティガイスの反応がするのだ。つまりこの少年がティガイスであることは間違いない。戦わなければならないのだろつ。

「もういい？」

レインは笑顔でたずねてくる。その表情には少し黒い部分があるような気がした。

私はウンと頷いた。それと同時にレインの拳銃が火を噴く。二つの拳銃からそれぞれ弾が飛び出したがそれは私の頬をかすめて後ろの草原の草に当たる。少し煙が舞い上がるが私は気にしない。

私はスピードの面では自信がないので拳銃を避けにくい。私はとりあえず『フライ』を使った。背中に羽が生えて空を飛べるようになる。とりあえず『ジャンプ』で一気に空へと飛ぶ。それを拳銃で撃つて来たが空中では当たりにくい。

私は空中から右の人差し指を伸ばす。その先に光の玉が集まる。そしてすぐにその玉から光の矢が何本も放たれる。それは全てレインを貫いたように見えたが簡単に避けられる。そのまま私はレインを見失う。

すぐ草原の周りを見渡すがレインの姿はどこにもない。次のとき私は背中に痛みを感じて地上に落ちた。グラングランする視線に映

ったのは空中でちょうどサッカーボールを蹴った後のようなポーズのレインだった。

蹴られたのだと判断した。

僕が背中を打ち付けてゆれる頭で目を開けた。

気づいたときにクリンは目の前までフライで飛んできた。既にすぐ数メートルの所まで来ている。そして近づきながら杖を振るうとそこからレイが数本出てきた。僕はそれを強く歯をかみ締めながら近くのビルに移って避ける。

クリンの放ったレイは先ほど僕のいたビルに直撃する。そのレイの威力のためかビルが崩れ始めた。すぐ隣のビルの屋上で僕は少し吐血した。先ほど打ったビルのせいでアバラの骨が少し折れたようだ。その骨が器官に当たって痛かった。

僕は背中を丸めて口元に手を当てながら咳きこんだ。その手の隙間から血が流れ始めた。

風を切る音がした。その方向を見るとクリンがまたこちらに接近してくるが僕はうまく避けられない。とりあえず億条の床を転がってレイを避けるが服を少し切り裂かれた。僕の口から血が流れる。

僕はふらつきながらその場を立った。胃からむせ上がるものがある。僕は少し咳き込むとまた血が出てきた。僕は血をぬぐってクリンを睨んだ。クリンはこちらを向いて少し微笑む。

『大丈夫ですか！？マスター！？』

「くっそ・・・クリン・・・！！てめえ・・・！！」

「あつはつはつは！！もっと楽しませてよ。ボウヤ？」

「くそつたれ！！」

僕は翼天でクリンに切りかかる。だが、クリンの移動速度は速すぎるためにそれを簡単に避けられてしまった。その速度は僕の目では追いつけない。

歯噛みした僕はクリンの居場所を探す。クリンは僕の真後ろのフエンスの上で笑いながら立っていた。それは気に食わないのだ。僕

は翼天を片手で回した。翼天は円のように見えるようになった。そして構えた。

ブウオオオオという風を切る音が絶え間なく続いている。そのまま一気に駆け、クリンの位置でその翼天を振り下ろした。その攻撃の威力は大きい。

クリンはバックで避けるがそこに何かが切りかかる。クリンの服の右肩の部分が少し切れた。これが『円風槍』えんふうそうという技である。これは風の追撃つきなのだ。

少しうろたえたクリンに僕自身が追撃しに一気に接近するがクリンの魔法はそれを許さずに僕の足元をエクスプロージョンで爆発させる。僕はそれを寸前の所で察知してその場から離れた。クリンは目の前にもういない。

僕の右からクリンの別の魔法が襲う。炎魔法の『フレア』だ。僕の右肩が少し焼けたがすぐに消えてしまう。

右を向くとそこには少しきつめの目でこちらを見ているクリンがそこにはいた。否・・・見ているのではなく睨んでいるのだ。

とりあえず僕は体ごとクリンの方を向く。クリンは自分の服が傷ついてしまったのになかなりショックのようだった。『すみません』と先ほどから何度も謝っている。誰にかは分からないが。

僕はとりあえず翼天をまた片手で回した円風槍だ。だが、その技を出す前に僕の体は風魔法『フウ』で吹き飛ばされていた。僕は翼天から風を出して空を飛んだ。

そしてクリンと真正面からにらみ合うが、不意にクリンが口を開いた。

「あなたが本気で来ると言うなら・・・こちらもそれ相当の力でやっつけるわ。」

その声は少し低くて危なさを感じさせた。僕は少し恐怖にののしりながら強気に振舞った。

「そうかい。ならこつちだつて手加減はしないさ。」  
僕とクリンは接近しあった。

地上に落とされた私は空中で落下し始めているレインに向かってレイを放った。全て弾かれてしまったけれどもフライとジャンプで一気に接近する。空中ではこちらのほうが強いのだ。

右手の本のページを変更して左手に炎を集めた。バスケットボールくらいの火の玉が左手の中にできる。それをレインに向かって投げた。

フライのある自分と違ってレインは空中ではうまく動けないのだ。これで完全に当たると思った。が、ドギユンと言う音と共にレインの拳銃が火を噴いた。

その弾丸の反動でレインは上空へと舞い上がった。つまり『ファイア』は避けられてしまったのだ。私は軽く舌打ちした。私も同じように上空へと舞い上がった。

真正面に並ぶと私はレインに腕を伸ばしてレイを唱える。だが、やはり拳銃を撃つてその反動で避けてしまった。何だかんだで空中戦も結構強いようだ。

私はいったん地に足をつけた。それと同時にレインも地に足をつける。私とレインはにらみ合うように見ているが、レインの表情は睨んでいるとは言えずに、笑っているとはいえない。

「・・・強いね・・・きみ・・・」

「ははは。きみこそ。」

レインはその拳銃を上を持ち上げる。カチャっと言う音と共に弾丸の種類が変わった。その弾丸をこちらに撃ってくる。その弾丸は普通の玉よりも少し速い球だった。

私の頬をかすめる。私はそのすぐ後にフライで空を飛んだ。その目の前にはレインも空中に上がってきた所だった。

レインはこちらに銃口を向けて引き金を引いた。先ほどと同じ少し早めの玉だったし、距離も近いのがあった為か弾丸は少し掠って行った。私はすぐに旋回して距離を稼いだ。

レインは自分とは反対の方向に二つの銃口を向けて放つ。その弾

丸の反動でレインはこちらに一気に接近してくる。それを見た私も一気にレインに近づいた。

2メートル程までのところになるとレインはこちらを撃つて来た。私はそれを飛びながら綺麗に避けていく。少ししかする程度で致命傷はない。

鼻先ほどの所へ来ると私は右手に『ファイア』をためてそれをレインに触れさせる。だが、それも寸前の所で避けられてしまう。

2人はそれぞれ距離をとった。その距離5メートルほど。私はにやりと笑って見せるとレインもにやりと笑った。どちらも余裕と言うことだった。2人はまた接近しあった。

接近しあった僕とクリンはそれぞれの攻撃を放ちあう。

『クラッシュ』

クリンはそういうだけでクリンの目の前に爆発が起こる。それも自分に向かって何発もやってくる。逃げ道などないに等しいその技は予想済みの攻撃だった。

『バリア』

僕はそう唱えた。僕は一応魔法と呼ばれるものが使える。ただ、補助と攻撃の弱いんだけど（ちなみにレイは結構高位）。

バリアを唱えると僕の周りに青っぽい薄い膜が三角形にできた。そのバリアはクラッシュの攻撃を完全に防いで僕のほうには通らせなかった。

さらに2人は接近しあう。次に先に動いたのは僕の方だった。

『翼天翔』  
よくてんしやう

で一気に速度を上げる。これはほんの一瞬だが空中での動きを早めるものだ。僕の翼天は空中でも地上でも結構強いのが特徴だ。山城さんと違って空中も強いのだ（嫌味）。

一気に接近した僕はその持っている翼天を振るう。それは虚空を斬った。僕はその体制で固まってしまった。

すぐ左側にはクリンがいた。右手を僕のこめかみに向けている。

その手も人差し指と中指だけ伸ばして親指を上に出している。その光景は銃を持ったかのように見える。目だけを動かしてクリンを確認すると口元は笑っていたが目は本気だ。

「バン。」

その声は明るかったがその声と共に僕とクリンの間に爆発が起こる。エクスプロージョンだ。僕は吹き飛ばされてよく分からないビルの屋上に背中を打ち付ける。そのビルの破片の煙が体を取り巻いた。

数秒して煙が引いた所に僕は立っていた。服はもうぼろぼろになってしまつてその残骸が僕の体を少し覆っている程度だ。僕は少し疲れてうつむき加減になっているのだろうか？とにかくもう眠りたかった。

そして僕の意識はもうろくし始めて来た。僕は少しふらついたが、体が何かにのつとられたかのようにうまく動かない。

それどころか勝手に動かされている感じた。不意に翼天の『マスター。借りますよ。』と言う声が聞こえたような気がしたけれどもどうでも良かった。

クリンは僕から見て約45。ほどの角度の空を漂つてこちらの様子を見ていた。僕は急にその方向を向いたが、それは僕の意味ではない。僕の意識は消えかかっている。

クリンはこちらを向いていてその光景を見て少し息を呑んだような気がした。その時やつと自分のおかれている状況が分かった。

・・・簡単に言えば女になっていたのだ。見た目は全て変わっていた。無論服も・・・。顔は完全に女の人となっている。髪は長くて目に入りそうで色は綺麗な青色だった。服は白い服で物凄い簡素だ。右手には翼天を持っている。

「あんた・・・いったい何者・・・？」

クリンはその女の人に向かって喋りかけてくる。自分はその光景を少しと浮くから宙に浮いてみていた。しかもよく見たら自分半透明だし・・・。

つまりは幽体離脱みたいなものなのか？とかへんなことを考えている僕だった。その意識は完全になくなっていくが。

「私は翼天。これは・・・まあ、半分マスターの姿を借りてるんだけどね。」

「いや・・・似てないし・・・。借りたと言うよりも独占しているって言ったほうが正しただけだね・・・。」

「まあ・・・独占でもいいかもしれないわね。」

二人は少し笑いあった。何でそこで波長が合うかは僕には理解できなかった。と言うか理解しなくなかった。

不意に翼天の笑いが止まるとその持つている槍（翼天）を構えた。「マスターの敵は私の敵だし・・・とりあえず君・・・殺すね？」

少し笑いの含んだその声が声に似合わないことを喋った。僕には最初その言葉の意味があまりよくは分からなかったがやがてその新の意味に気がつくとかかなり驚いた。外見と言いたいことはかけ離れているのだ。

クリンも少し笑って構える。こちらを受けてたつと言う事なのだろうが・・・。それから少しの間時が止まったかのようなだった。それは数時間かもしれないし数分かもしれない。はたまた数秒かもしれない時間だった。

動いたのはクリンだ。一気に接近しながらレイをいつもの二倍ましくらいで放ってきた。

それを翼天は目にも留まらぬ速さで避けていく。そのレイは掠りもしなかった。そして翼天は地を蹴った。一瞬にしてクリンの目の前にまで接近する。そしてその槍を振るうとそのあまりの速さにクリンは避ける間もなかった。

クリンの左肩の部分から血が飛び出た。クリンは右の手でその傷口をすぐに押さえたが、その血の量は血を押さえきるには不可能な量だった。クリンは翼天を睨んだ。

そこに翼天の一撃が走った。が、その攻撃は突然割り込んできた何者かによって防がれてしまったのだ。

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

二人の息はほとんど同じくらい乱れている。私は一気にレイを唱えると一気にレイがレインに向かって飛んでいく。

レインはそのレイを特殊な弾丸を撃つてはじく。その弾丸は撃つたと同時に目の前に盾のようなものができるものだった。レイにもうち抜けないほどの強度のものだ。

二人は息を荒くして距離をとっている。私が次の攻撃に出ようとすると誰かが割り込んできた。

白い仮面をつけた金髪の少年だった。仮面は少し髪が出る程度で完全に顔を覆っているためにその表情は全く見えない。とにかく私とレインの間に立っているだけだったが、不意に口が動いたと思われる。

そのコトバの矛先は私ではなくてレインのようだった。

「君がここで死ぬわけには行かないだろ？さっさと行くんのだ。」

「あ・・・ああ・・・。」

「ちよつと待つて！！まだ私との戦いが・・・！！」

その言葉は最後まで続かなかった。その仮面の男が突き出したてはこちらに向いていてそこから三つほどの光が走る。それは私の目の前ではじけて私は不意に目をつぶってしまう。次に目を開けたときには誰もいなかった。

ただ一人私だけが地上に立ち尽くしている。

『そつちはどう？終わった？』

レイラさんの声が耳元のイヤホンから伝わってきた。この前とほとんど同じものだが、結構高性能で浸水も大丈夫ない奴なのだ。私は胸元についているマイクを口元に近づけた。

『すみません。逃がしてしまいました。』

『うん。分かったよ。とりあえず帰還して。』

私は『はい』と答える。それと同時に私は移動魔法で戦艦アスカへと飛ばされた。目を開けたときには違う場所なことに気

づいた。そこはいつもの転送機の場所ではなく、司令室だった。

私はすぐ傍にいるレイラさんの表情を見る。その顔は困惑そして驚きに見舞われていた。だが、その視線の先は私ではなく一番大きな液晶だった。それを私も見てみる。

時間は少し前に戻る。

私が転送された先は森がいつそうに生い茂られた場所だった。私は歩き出そうとして少しふらついて近くにあった木に背をつける。まだ力がうまく入らない。ちよつと無理をしすぎたかもね……。

私はとりあえず方向がわからないので適当な方向へと歩き始めた。歩きたびにガサガサと言う草を掻き分ける音が響く。その音は痛い頭へも響いた。痛みはさらに深くなる。

私はふらつきながら前へと進む。そのせいで下にあった木の根に足を取られてしまう。私は前へと転んでしまった。その表示に鼻をぶつけてしまった少し痛い。だが、そのおかげが見難かった森が見やすくなった。

その森は少し黒くよんどいて木からは多くのツルが垂れている。木の中には少し針のようなものが付いたものもある。とにかく見たこと無いものが多かった。

その時不意にパキンという木を踏む音が聞こえた。私はすぐに体を動かすのをやめた。起き上がる寸前まで来ていたが、こうなっただけ一度止まるしかないのだ。とにかく目の前を歩いていると思われるほうに聞き耳を立てた。

『あれ……大丈夫ですかね？』

『ばれないよ。私たちの影はよくやってくれるはず。とりあえず私たちの狙いはあの山城ギンって女の子。』

（え？私……？）

声は少年のように男っぽくて幼い声だった。もう一人いてその声は女の人のようだ。それよりも問題はその会話の内容だ。私が狙い……？何で……？

とにかく私は今ろくに戦える状況ではない。私は起き上がろうとしたが……

「こんにちわ。ギンさん。」

目の前にはこの前であった少年が立っていた。私は絶叫する。だがそれを許さずに少年の一撃が横の腹に決まる。私はその攻撃の痛みでその場にまた倒れた。

ゲホツと喉までむせ上がったものを吐いた。口元近くの土が私の吐いた、血で赤くなる。私は薄れ行く意識の中でそれを確認した。他に確認できたのは横っ腹の痛みだけだ。

私の意識は唐突に無くなってしまった。

僕が飛鳥に着いたときはみんな司令室で仕事をやっているところだった。適合者の中では僕が一番初めに帰還したようだ。

とにかく僕は自分の指令室用の椅子に座る。そこへ先輩が戦闘から帰ってきた。先輩は母さんのすぐ横に現れる。母さんはなぜか先輩を見ようとせず大画面の液晶を見ている。

僕もその液晶画面を見た。そこには一つの動画が送られてきている。その動画を見るようだ。

その動画の内容は一つの暗い部屋のような。そこにはこの前の動画と同じ青年が立っている。だが、一番気になったのはその足元にある……

「……な……!？」

先輩の驚きやその他のことが声に混じっていることが分かる。

その青年の足元には山城ギンがいる。そして山城さんはその青年に踏まれている。さらに山城さんは血だらけの状態で倒れている。その傷の深さは半端じゃなくて生きているかどうかすら分からない。

青年は山城さんの方を少し見るとニヤリと笑って山城さんを蹴った。蹴った場所から山城さんの血が噴出す。そのすぐ後に口から血を吐き出し、げげほと咳き込んだ所を見るとまだ生きているようだ。

青年はまたこちらを見直して

『この女を助けたかったらお前らの持つているクリスタルを全部こちらによこすんだ。それができなければこの女は殺す。』

場所はE - 85・92地点近くの城の中で待っている。早く来いよな。』

その動画はそこまで終わっている。僕はため息を一つついた。そこへたつたと走り去って行く先輩が横目に見える。僕もその先輩の後を追うことにした。みんなは画面を見ているだけでこちらに気づかない。

「おい！！先輩！！」

廊下の所で僕は先輩に声をかける。先輩は少し横を向いて目だけでこちらを見た。その右手にはクリスタルがたくさん握られている。僕はそれで先輩の考えが分かった。

「・・・高野・・・。いくら貴方でも・・・渡せない・・・。」

僕はため息を一つつく。そして後には『僕も行くよ』と言っていた。そのせりふは自分でも驚きだったが、言ったことに後悔はほとんど無かった。とりあえず僕は立ち止まった先輩に走って追いつく。先輩は僕が真横にたどり着くと自分のクリスタルを解放して魔法を唱える。『ムーヴ』。その魔法を唱えると同時に僕と先輩の視界が真っ白に変わっていく。僕は目をつぶる。

次に目を開けた時に目の前に現れたのは黒い城だった。僕らは今その手前にある森の中で城の様子を覗いている。城の周辺には良く分からない機械物が漂っている。その数は40ほど。

機械は黄色いものが多い。その姿は少しこつめで攻撃に当たると痛そうだ。とにかく単身突入は危ないと言えるだろう。

僕は作戦を考える。たつた一つ思いつくものがあるが、それをやるかどうかかなり迷う。突然先輩がつぶやいた。

「・・・ギン・・・。・・・今・・・行く・・・。」

僕は立ち上がりかけた先輩を制した。そして僕が奴らをひきつけ

ると言う先輩はかなり驚いていた。先輩が何か言おうとしていたが、僕はそれを聞かずに走り出した。

機械がいつせいにこちらを向く。僕は少し恐怖するがすぐにクリスタルを解放して先輩が入るために扉前の敵を切り裂いていく。先輩は僕の化成に入ろうとしたが、僕は目で先輩を制した。先輩はそれを見ると、僕の気持ちを知ったかのように走り出した。

先輩は一気に入り口の所まで着たその後また僕のほうを向いたが早く行けといわなければかりに僕は先輩を睨み返す。

先輩は肩をすくめて一気に扉を開いた。それに機械が群がっていき僕がその扉と機械の間に入り込む。そして翼天を構える。この先は一步も通さないつもりだ。

「手前等かかって来いよ！！この先は一步も通さねえ！！」  
機械たちが僕に向かって飛び込んでくる。

私はお城の中を走っている。外とは違って中は機械が一匹もいない。だから私は止まらずには知り続けた。城の中では自分の息継ぎと靴の音が響いている。

城の内装は一直線が多かった。こういうお城ではそのほうがいいのだ。私はとりあえずその通りの道を進む。

私は途中で一つの扉を通り過ぎたことに気づく。その扉には文字が書かれている。とりあえず『管理室』と書かれていた。私はゆっくりとドアノブを回して一気に扉を開けた。そこには大きいロボットが3機ほどこちらを見に来る。

私は苦笑いしてドアを閉めようとするがロボットの一つが扉に手をかけて動かさなかった。その力はかなり強い。

「・・・あ・・・！！・・・解放！！・・・いくよ・・・サンハート！！」

クリスタルが一気に本となる。私はその本を片手に持って右手でレイを唱えた。手前にいた機械はそれが全て直撃する。それで手前の機械は爆発するが、後ろにいた機械たちは貫通したレイを軽々と

避けてしまっ。

二つの機械は空中へ飛びながら右腕をこちらに向けてきた。その右腕の手の甲から二つの筒が出てくる。そしてその筒が火を吹く。その筒から出たマシンガンは私の足元を少しづつ破壊する。私は驚いて足をばたつかせた。

すぐにジャンプとフライで低空で空を飛ぶ。そして機械の一体に一気に接近する。

機械は右腕の筒型マシンガンをもたしまつて腰からさらに筒状のものを握った。そして指元にあるボタンを押したようだ。そのとたんに筒状の光が走る。長さは1m50くらいになると伸びるのが止まった。

それを機械は私に向かって振るう。部屋が暗いせいもあって振るうとその軌道がかなり見やすい。その軌道の色はピンク色で綺麗な色だったが、それに当たった近くの棚は焦げたように斬られた部分の部屋が避けていく。

そういえば私は聞いたことがあった。ビームセイバーと呼ばれる剣がありその剣を使うとその高温のために斬られた所が解けていくのだ。それほど恐ろしい剣らしい。

私は機械の後ろに回る。そして機械の背中に右手の拳を合わせる。と『波』と言うとその手から風と炎が噴出す。機械はそのまま真っ直ぐ吹き飛ぶ。そして後ろの壁に激突した機械はそのままドガンと爆発する。

残りもう一揆の機械が背中につけたジェットで一気に接近してそのビームセイバーで斬りかかって来る。私はそれを低めにジャンプして回避する。そのピンク色の軌道が収まったと同時に右手を機械に向けた。

『レイ』と唱えるとその手の手前に光の玉ができてその玉から光の矢が機械に降り注がれる。そして機械を貫通したレイは地面に古河とを残して消え去る。

貫かれた機械はバリバリと電気をほとばせるとドガンと赤く爆発

した。私はそれと同時にため息を一つついてクリスタルを元に戻す。そして奥にあった扉へと歩く。

その扉は鉄で作られて二重になっている。私はその重い扉をゆつくりと開く。暗かったその部屋から明るい部屋へと移ってしまった。為に目がちかちかとしてきた。少し目をとじてゆつくりと目を開ける。

そこには三人の人型のものが居座っていた。

一人は動画に映っていた人が中央の少し豪華な椅子に座っている。その右側にはこの前戦ったレインという少年が体育すわりをしている。反対側には女の人が立っていた。

私はまたクリスタルを解放して一気にレイで三人を攻撃する。青年以外はその場からさっと避けてレイを交わすが、青年はその椅子から動こうとしないで私に聞こえない声で呟くと目の前にシールドが現れる。

レイはそのシールドに当たると消えてなくなる。

青年はその光景を嘲笑しながら見ていた。私はレイをやめると同時に何かによって右側に吹き飛ばされる。壁に背中を撃つたと同時に服に傷がついているのに気づく。魔法だ。風魔法『フウ』のせいだろう。

私は真っ直ぐ敵を見据える。そこには杖を片手に持った女の人を立てている。杖の先はこちらを向いていた。私は唇を噛んだ。

すぐに立ち上がると私も『フウ』を唱える。その瞬間に女の人と魔法の間にレインが入ってくる。そして弾丸を撃ってくる。フウによるフウの抵抗は受けずに私に向かって飛んでくる。フウを唱えた後の反動でうまく避けられずに弾丸は私の頬を掠っていく。

私は2人を睨んだ。

私は暗闇の中にいる……。そこでうつ伏せになっている自分がそこにはいた。

私は起きているのかどうかも分からない。ただ私はそこに倒れて

いた。

薄く目を開けると真っ黒な空間に赤い筋が入り始めている。

私は痛い体を起こして仰向けになる。その仰向けになった場所に光が降り注いだ。そっちの方向を見てみるとそこだけ黒い空間が割れて黄色いような白いような光がこちらに差し込んでくる。

そこに何かが降りてくるのが見えた。それが何かは私からは逆光になって見えなかったが緑色の目がこちらに向いているのだけがあった。その姿は女性のようなのだ。

不意に女性の口が動く。何かを喋っている様だが音は出ていない。

「・・・それを使えと・・・？」

さらにその女性の口は動いた。私にはなんと言っているかはわかった。

「・・・分かりました。・・・やればいいんですね・・・？」

女性は頷いた。そしてまた空へと戻っていくそれを私は最後に見た。

## 最終話 レクスラッド

私は起きたときにその場所が全く分からなかった。ただ、周りかなりじとじとした所だ。とにかく私は仰向けになった上半身を置き上げる。頭が少し痛かったが先ほどよりは気にならない。

私は今度は立ち上がる。そして今の現状を判断するために周りを見回した。部屋は石で作られた紫色下部屋で、棚などは何もない扉が一つあるだけだ。電気もない。

私は扉へと近づきドアのノブを回してみる。鍵はかかっておらず、  
・・と言うよりも鍵穴すらも見つからない。

開けた先はアスカの廊下とほとんど似たような一直線な廊下だ。私はとりあえず今の状況から見て左側の位置を歩いた。

やがて一つの扉が見える。扉には『管理室』と書かれている。私はゆっくりとその扉のノブを回す。カチャリという音と共に扉はききいと開き始めた。ゆっくりと横目で中の様子を伺った。

中では三つの機械らしきものが黒焦げの状態で倒れている。だがその姿も無残なものになっていることは言うまでも無い。

私は中に入ると一直線に反対側の扉に向かう。そして一気にドアを開いた。私の目が一気に見開かれる。

「うわあああああああああ！！！！」

血らだけに倒れる小百合・・血だらけになった剣を持った青年・・。そしてその横にいる2人の少年と女性。

『解放』砕けた心で言えた言葉はそれだけだった。それだけで持っていた赤竜は剣となり自分の力となる。私はその青年を見据えたが、自分の瞳の色が黄色いことに気づいている。

私は一気にその足で駆け抜けた。目標はただ一つその青年だけだった。だが、左から来たけり一気に直撃してしまう。私はその方向に顔を向けるとそこにはあの少年がいた。

私はその少年を睨んだ。瞬間的に少年の姿は消え、右側に現れる。

私は俊足赤竜双で一気にスピードに追いつく。そして一発殴ってやるとその反動で少年は壁に激突する。頭を思いっきりぶつけたようでそこから血が出ている。

私はまた青年を見据える。青年はその状況にかなり驚いたようだ。私は一気に接近するが、女性が間に割り込んでくる。

私は邪魔だと言わんばかりに女性を殴り飛ばした。女性も性根の隣にぶつかって気を失ってしまう。私はその場で立ち止まって青年の方向を更にみすえた。青年はこちらをにらみ返して嘲笑する。

私は一気に接近して切りかかるが青年は持っていた剣でその攻撃を受け止めてしまった。私はその状態で一気に力をこめるが全く微動だにしない。いったん私は攻撃をやめて引く。そして待た赤竜を構えた。

「君は何のために戦うのかい・・・？」

青年は不意に話しかけてくる。私はその話には耳を貸さずにただその青年を睨んでいるだけだ。

「クリスタルとは何だと思う・・・？私はそれを力だとは思わない。」

私は少年が話している途中なのに赤竜閃で攻撃を仕掛ける。青年はそれを剣を持っているのとは反対の方向の手でその赤竜閃を弾いた。赤竜閃は変な方向に飛んでいつて消えてしまう。私はその間に接近して切りかかる。

それも剣で簡単にあしらわれてしまう。私は懲りずにまた飛び出しながら斬った。今度は足を上げてもないのに一瞬にして横に動き回る。それだけで簡単に攻撃を避けられてしまった。

私はそれを俊足赤竜双で追いつきながら攻撃をするがその速度よりも速い速度で青年はフットワークで一気に横に逃げる。それを赤竜で横切りにして青年を切り込むが切ったのは青年ではなく、青年の形をした影だった。

瞬間に右側からのけりに私は吹き飛ばされる。反対側に飛んで行きその壁に背中をぶつけると口から少し血が流れる。下唇を少し噛

んでしまったようだ。

私は青年を睨む。青年はただ笑うだけで他の表情をしようとしな  
いと言うよりもできないような雰囲気だ。

赤竜を強く握って一気に接近して切りかけると青年は避けようと  
せずに持っている剣でその攻撃を防いだ。ジリジリといいながら赤  
竜と剣は微動だにしているが、やがて青年が少し一押しすると私は  
簡単に吹き飛ばされる。

私は足について青年を見るとそこにあつたのは残念そうに顔を落  
としている青年の姿だった。青年はこちらが言葉を返すとは思わず  
に会話を始めた。

「はぁ・・・残念だね。君のその『力』なら僕を楽しませてくれる  
と思っていたのに・・・。全く持つて残念だよ。」

その会話をしている途中で私は奴に切りかかる。それも簡単に抑  
えられてしまうが、キレた私にはそんなことどうでも良かった。た  
だぐちゃぐちゃにしてやりたかったのだ。

私はバックステップしてまた切りかかる。その時『ん?』と青年  
は呟いて私とはあさつての方向を向く。青年は珍しく大きく動いた。  
そこに一人の男性が槍で切りかかる。高野だ。

高野はかわされた槍を返してもう一度青年に切りかかる。それは  
首をかするが、致命傷となるような大きなダメージには絶対になら  
ない。とにかく高野は連続で翼天を回しながら攻撃しまくるが、そ  
の全ての攻撃を青年は避けた。

「お前・・・何者だ・・・!? その動き・・・只者じゃないな!？」

「私はウィルキスⅡラグドンプ。3の守護レイシャドウの一人ラグ  
ドンプだ。君にはその意味・・・分かるよね?」

「ラグドンプ!? ならばお前らの『シユ』はどうした!？」

私には良く分からない単語が良く出てきたがとにかくあんまりい  
いことではないことが分かる。とにかく私はその二人の行動を見続  
けていた。2人はただ睨み合っている。

ただ話し合っているだけなのだ。

「お前ら・・・何が目的なんだ・・・!?」

「私たちはこの世界が嫌いなのだ。『シュ』と共に生きたいと言う思いもある。なので世界を征服すると言うことは大切なことなのだ。邪魔はさせない。」

「そんなことさせない!!させてたまるか!!」

「なら止めてみるか?できるものならね。」

不意にウィルキスは影となってその場から消えてしまう。気がついたときにウィルキスは私の目の前にいる。構えが少し解けていたので構えるがその格好をする前に私の動きは止まった。

ウィルキスがこちらを物凄い形相で睨んでいるのだ。いつもとは違うその表情に私は怖気づいたかのように動きが止まってしまったのだ。

私の額から汗が噴出した。

「フッフ・・・私の見つけた技術と力を魅してあげますよ。」

不意に彼の手が私に伸びる。私はビクツとしたがその圧倒力での場から動けない。彼は私の持っている赤竜をつかむ。するとそこから電気がほとばしる。

その電気は私は痛くはないがウィルキスは少し顔を引きつらせるが私の赤竜を手からもぎ取った。

パキツと言う音と共に赤竜は宝石に戻ってしまう。その時に『あつ!!』という赤竜の声が聞こえる。高野はウィルキスに翼天の先を突きつけた。

「その赤竜を返せ!!それは山城さんのものだ!!お前のものではない!!」

「ふっふっふ・・・何も知らないのだな・・・。このクリスタルはクリスタルの中でも特別で他のクリスタルを呼び集めることができるのだ。故にこのクリスタルは『収載者』とも呼ばれることがあるのだ。」

ウィルキスは赤竜を高々と上げた。そこから白い光が回りに満ち溢れる。不意に高野の翼天の解放が切れてクリスタルへと戻ってし

まいそのクリスタルはウィルキスの持っていた赤竜へと飛んでいく。小百合の持っていたほかのクリスタルまでもが全て赤竜の元へと集まっていく。その数約15個ほど。

不意に光が一気に強くなるとクリスタルはくつついて一つとなる。その色は虹色に輝いている。それと同時に満ち溢れていた白い光が消える。

「ふっはっははは！！この伝説のクリスタルの力を見せてやるよ！！」  
そのウィルキスは表情が変わっている。その表所はいつもの冷静な青年ではなくて、少し壊れた青年だ。完全に壊れていると言えるだろう。その口元には笑いがこもられていた。

ウィルキスがそのクリスタルを握ろうとしたときにクリスタルから光が満ち溢れた。その光景を見て一番驚いていたのはウィルキス本人だったのだ。そのことに私は首をかしげた。

「バカな！？クリスタルが一つ足りないだど！？」

その悲劇的な声が聞こえたのが最後で何も見えなくなるほど光が満ち溢れる。グブバアという変な音が聞こえると同時に光がまた消え始めた。

僕はつぶつてしまった目をゆっくりと開き始める。

「こんなはずでは・・・こんなはずではなかったのに・・・！！」

その姿は見るに耐えないほどのひどい姿だった。顔は獣のように口が飛び出て牙が見えている。体は先ほどとは見違えるかのように筋肉モリモリの巨漢へと変貌してしまっている。それも獣のように背中からは翼が1つずつついていて底に三本の骨がくつきりと見える。足はその大きな体を支えるように太く短い。

あのウィルキスの面影は微塵にも見えない。

僕が思うにはクリスタルを全て集めるはずの力が発動したが全て集まりきらずに合体してしまったせいでまたクリスタルが離れようとしたがウィルキスがそれを認めずにその未完成な合成物無理やりに取り込んだために変形してしまっただんだと思う。

彼の額からその未完成な合成クリスタルが浮き出た。

不意にその怪物は羽を動かして飛ばうとするとその大きな翼から風が吹き荒れた。僕は何の前置きもせずに先輩の元へと向かう。大きな風が吹けば倒れている先輩の体は切り刻まれてしまうだろう。さすがにそれはまずいのだ。

僕は先輩の体を抱きかかえた。ちょうどお姫様抱っこのような形になってしまい僕は少し恥ずかしくなる。

その時先輩から『う・・・』と言う呻き声が聞こえる。先輩はまだ生きているのだ。僕は少し安堵した。

だが、まだ先輩が死んでしまっていると誤解している山城さんの方を向く。そして生きていると言おうとした所で異変に気がつく。

先輩は顔を上げる。僕はその光景を見て違和感の意味が完全に分かった。その山城さんの雰囲気完全に危ない人に代わっている。中学時代はそつち系だったと言う話は聞いたことがあったが、そのレベルではないと言える。

山城さんはずっと握り続けていた左手を前に伸ばして手の平を見せた。そこには真っ白で少し透明感のあるクリスタルがあった。それは僕の見たことの無いものだ。

「なぜだ！？何故貴様が最後のクリスタルを持っているのだ!？」

「・・・レクス・・・。」

『YES.』

「・・・解放・・・。」

その呟いた山城さんの手元には白いクリスタルのはまった短刀が二つほど両手に逆手で握られている。形は曲がったダガータイプでつばの部分は四角のようになっている。山城さんは逆手に握った『レクス』の先を怪物に向ける。

怪物はその短剣を見るとすぐさま攻撃しに飛んで接近してくる。この部屋の天井の高さは異常で7m前後はあるだろうか・・・そこを飛び回っている怪物がそこにはいた。大きさは2メートルくらい大ききなのでそこまできつくは無いようだ。

山城さんは飛んでいる怪物に向けて一飛びすると一気に怪物の目の前にまで飛んでいく。怪物はその光景を見て目を丸くする。いきなり解放したクリスタルではあんまり戦いはできないのが普通なのだ。

山城さんは左肩を怪物に向けて右手に持ったレクスで怪物に切りかかった。怪物はそれを右腕で受け止める。カキンという金属の音が鳴り響いた。怪物の右腕は少しレクスが切り込まれている。そこから血が流れ出しているのだ。

怪物は右手を振り払って山城さんを吹き飛ばした。

「・・・飛行・・・」

山城さんは空中で落下が止まる。僕のように風を利用したものでなくて普通に飛んでいるようだ。山城さんはそのまま猛スピードで怪物に近づいてそのレクスを振るう。

その軌道は完全に怪物を捕らえており、避けることは困難だったがその攻撃を怪物は、解放して持っていた剣で防いだ。

『マスター・・・。その姿は・・・。』

「大丈夫だ山嵐。やまあらし俺はいける!!」

怪物の持っている剣は山嵐と言うらしい。

ギリギリと言う金属の触れ合う音がする中で怪物と山城さんはその武器に力をこめている。その途中で山城さんはもう片方のレクスで切りかけるがその寸前の所で怪物はバックステップして避けてしまふ。

不意に怪物の『ううう』と言う苦悶の声が響いた。山城さんは体を丸めて『はああああ!!』と力をこめた。そして次の時には体を逆にそって痛そうにもがいていた。それが始まると同時に髪の毛の生え際から髪の色が銀色へと変色していく。

全て銀色になったと同時に二人の痛みの感じがなくなったかのように少しの間沈黙が流れた。それは数秒かもしれないし数分かもしれないが良く分からない。

先に動き出したのは山城さんだった。山城さんはレクスを振るよ

りも先に全体から何かを出す。それは透明でよくは見えなかったが怪物は少し奥に吹き飛んだ。それはただ単に動きを少しとめるだけしかできない。

そこに山城さんの一撃が怪物を襲った。

その一撃は怪物の首に当たったがそれは首を通り抜けずに5？ほど食い込んだ後にそれよりも動かなくなってしまう。

そこに怪物の一撃が山城さんを襲おうとするがもう一本のレクスでその攻撃は止められてしまう。それから二人は少しも動かずにただただにらみ合っているだけだった。

「はああ！」と言う山城さんの声でその現状は変わりだす。

2人はバックステップで距離を稼いだ。山城さんはすぐにレクスを振るう。その軌道からカマイタチのような鋭い風が怪物に向かって切り裂きだす。

怪物はその攻撃を雄叫び一つで打ち消した。そして体制の崩れた山城さんを怪物は一気に接近して攻撃を仕掛ける。

山城さんはその攻撃が直撃して吹き飛んだ。だが、空中で体制を元に戻すとレクス二つをカチンとぶつけ合わせた。するとレクスは鉄の銀色から真つ赤な赤色へと色が変わった。

『ブラッドソード。』

山城さんはその真つ赤に染まったレクスで怪物に攻撃を仕掛ける。その攻撃は赤い軌道で敵を捕らえようとするも当たらない。

怪物は左手を右手に持つている山嵐の刃の部分をなでた。そうすると刃は不快な音を立てて色が変色して行く。その色は完全な黒色と化していた。

「……これが最後の一撃……。」

「……決める……！」

2人はそれぞれ近づきあってそれぞれの剣の刃を振るった。赤と黒の軌道がぶつかり合ってバチバチと音を鳴らし続ける。山城さんは一押しをするがそれは怪物にはなかなか届かない。

二つの光が瞬いて自分にはかなりまぶしかった。そして次の瞬間

！！

ガジリン！！と赤の光が黒の光を飲み込んだ。その時の光は驚くほど煌いて自分は目を瞑ってしまった。

ゆっくりと目を開けると2人ともまだ上空に飛んでいたが、二人とも一步も動こうとしなかった。左記に動いたのはウイルキスのほうだった。急にグラツトゆれると一気に地上に急降下し始めた。

ドサリという音で怪物は地面につく。それと同時に山城さんも地上にゆっくりと降りてきた。

山城さんは地上に足がつくと同時に膝をついて前屈みになり手を口に当てて咳き込んだ。山城さんはゆっくりとその手を自分の前に持ってきて確認した。それは僕からも見える位置でやっている。

「山城さん！！それ・・・！！」

山城さん手は血でぐっしょりと濡れている。ウイルキスの返り血ではなくて自分の吐いた血だということは口の端からたれている血が物語っている。

僕は山城さんに近づいたが「来ないで！！」と止められてしまう。僕はその言葉に従ってその場に止まった。

山城さんは左手に持ったレクスを床において右手に持っていたレクスだけを逆手に構えてウイルキスに近づく。ウイルキスは薄く目を開けてただその光景を見ている。

山城さんがウイルキスの目の前まで来ると逆手に握ったレクスを両手に握り替えて高らかに振り上げる。

「・・・最後に・・・言い残すことはない・・・？」

その声には疲れやその他もろもろが多く含まれていることが分かる。

「・・・何もない・・・。ただ・・・あの2人だけは・・・許してやってくれ・・・。」

あの2人・・・レインとクリンのことだろうか・・・？そのことについては山城さんはくんと一つ頷いてその後レクスを振り下ろした。その軌道にあるのはウイルキスの首だった。

ズブアバと肉の切れる音がその室内に響きわたる。それと同時に突然吹き荒れた風が灰となったウィルキスは消えてなくなってしまう。灰は部屋の中を回って完全に消えてしまう。

僕は安堵のため息をつくが山城さんが急に前のめりに倒れてしまった。僕は倒れる山城さんに急いで近づいく。

倒れる瞬間に下にもぐりこみ山城さんのショックを吸収した。ドサリという音で僕の上に山城さんは倒れこんでくる。僕は彼女を仰向けにさせて膝に頭を乗せる。

「おい！！山城さん！！大丈夫か！？」

「・・・たか・・・の・・・？」

彼女の声は弱々しく力や破棄など微塵もない。握っていたレクスを落とすほどだった。

「しつかりしろ！！今助けてやるから！！」

「・・・私よりも・・・他の三人を・・・」

他のと言うことはレインとクリンと先輩のことだろうか？とにかく僕は彼女と会話をする。

「一体何がどうなっているんだ！？」

「・・・もう・・・時間が・・・ない・・・」

山城さんは自身の震える手を天井に向かって伸ばす。その後握っていた手を解くとそこから光が走り天井を突き破って空へと簡単に到達してしまう。その光の色は虹色だった。

そして光がいつそう強くなりパリンという割れる音と共にクリスタルは各地へと飛び出していった。

その飛び出してゆくクリスタルの一つが僕の手元に、また一つが先輩のもとに飛んでいく。山城さんのほうへは飛んでこなかったし、レクスはいつの間にか消えている。

僕はゆつくりと目を閉じていく山城さんに気がついた。

「おい！！死ぬな！！山城さん！！」

「・・・死には・・・しないさ・・・。・・・いつかは・・・また・・・」

山城さんは動かなくなってしまった。心臓は動いているものにくらゆすつても起きる気配は無かった。これが彼女の望んだ結末なのだ。僕はただ翼天を握りながらその光景を呆然と見続けていた。気づいたのは母さんの通信が入った時だった。それまでずっと同じ所で呆気にとられていた様だ。

僕はこの終わり方に納得いかなかった。それにまだ『シュ』も見つかってはいない。この戦いは続くと思われる。

あれからとりあえず2週間ほどたった。先輩も病院から開放されて今は自分の部屋にいるかと思われる。とにかくかなりの時間が経ったのだ。

あの事件は通称『ウィルキスクリスタル事件』と称されて語り継がれることとなる。

2週間たった今でもまだ山城さんは目を開けない。今は機関内の特別治療室で寝かされている。

栄養等も特には与えていないようだがその見た目は全く衰えることを知らない感じだ。ずっと何も変わりも無く眠り続けている。本当に何も変わりが無く……。

僕は毎日学校に行く前に山城さんの容態を見ていく。それが日課になってしまったのだ。

それに……山城さんが目を開けたら謝りたかった。特に何をというわけではないが『ごめんなさい』と一言言いたかった。その為かどうかは分からずに僕は毎日ここに通い続けている。

それでも山城さんは一度も起きない。僕は彼女の部屋の中でため息を一つつき、その部屋を後にする。

扉の先で立っていたのは母さんだった。その背中には先輩も心配そうに少し開いた扉から山城さんの方向を見ている。

「まだ起きないのね……山城さん……。」

母さんが少し落ち着いているが少しガラッとした声を放った。こ

「最近仕事が忙しかったらしい。」

「ああ・・・。」

僕は簡単な答えを呟いて視線を自分の足元を見る。いや、見るというよりも視線を母さんから外したと言う感じだった。母さんはため息を一つついて山城さんをじつと見つめている先輩のほうを向いた。

先輩は母さんの視線に気がつくといくくんと一つ頷いて制服のスライトのポケットに手を突っ込んだ。そこからきらりと光る宝石が出てきた。その宝石の色は血のように真っ赤に染まっている。

「これは・・・赤竜・・・？」

「うん・・・。探すの苦労したんだ・・・。」

「貴方が彼女に渡しなさい。」

母さんの声のはつきりとその廊下に響き渡った。その言葉は僕にしてみれば意味が良く分からないもので、何故僕が選ばれたのかさっぱり分からない。

こういうのはやっぱり昔から友達だった、先輩がやることだと思うのは僕だけなのだろうか？

とにかく今の気持ちを言葉にして母さんにぶつける。

「何故僕が？こういうのは先輩が一番似合っていると思うけど・・・。」

「彼女に謝りたいんでしょ？」

「！？」

先輩のその一言で僕の何かが砕け散ってしまったようだ。下に下ろした左手をギュッと握り締めて右手で赤竜を受け取った。

そしてまた部屋の扉を開けて、部屋の中へと足を踏み出した。今度はドアが完全に閉まってしまふ。僕は山城さんに近づきながら遠ざかって行く足音を捕らえる。

山城さんの近くの椅子に腰を下ろすと先ほどまで強く握っていた左手で山城さんの右手を握った。

どくんどくと心音の音がするがそれが僕のものなのか、山城さ

んのものなのかは区別がつかなかった。僕はなぜか緊張をしていたのだ。ゴクリと生唾を飲み込んだ。

山城さんの手を握っても山城さんは起きる気配がない。僕は少しガツカリしたかのように肩を落としながらため息を一つついた。そして左手を山城さんの右手からはずした。

次に視線に入ったのは近くにあった花瓶の置いてある棚だった。

僕はそこに赤竜を置いて今度こそ本当に部屋を出た。これから学校があるので遅くまでここに入られないのだ。

誰もいなくなった一室で赤い宝石がきらりと一瞬輝いた。

END

## あとがき

はい、みなさん始めまして、磯ヶ谷 拓斗です。

LEXRAD見てくださいましたありがとうございます。

見ないで前口上からすぐにあとがきを見てきた人は内容つまらなくてすいません。本当にすいません（涙

それでも当時は「おもしれええ！！」と思ってたんですと。いや、だからこそ黒歴史なんですが。

この物語、かなりいろいろな作品に影響を受けてます。

”でいーぐれ”とか”なのは”とか”りぼーん”とかが一番影響強かったです。当時好きだったアニメだからね！あの時代は一日中アニメばかり見てある意味充実した毎日だった気がします……。今も大して変わりませんが。

とりあえず物語りはあんな感じで終了します。

めっちゃくちや中途半端に終わります。結局『シュ』とかなんやねんで終わります。伏線なんてなかった。

まあ、小さな黒歴史ですよ。本当に小さいですけど。

もつとも、一番最初に書いた小説（小学校3年生）は絶対に見せませんが。というかデータ残ってませんが。当時としては「おもしれええ」つて（ry

夢才チ物語なんですけどねッ！！あれはガチ黒歴史なのです……。

さてさて、どうしてこのような小さな黒歴史……いや、黒じゃなくて灰色くらいの歴史ですけど。とにかく、この話をここに上げたか

と言いますと……

この話、リメイクして書き直したいなーと思いついて……

ちよつ、無謀とか思わないでください!!

いや、私としてはこの物語リメイクするの!? やめておいたほうが……タイプなんです、中学1年生の時コレを呼んでくれた奴が「リメイクして書き直せば?」と言ったんです。

お前……余計な事を……。と思いながらもリメイクしようかなあと考えております。

でも、さすがに物語の展開とか、キャラクタは変えようと思います……。

山代ギンって女の子の名前としてどうなのでしょう……。さすがに残念な子な気がします……。

どう転ぶのかは分かりません。

しかし、書いて欲しいと頼まれたからには書いた方がいいのかなーって思っています。

というわけで、『書きます』!!!!

あまり期待しないでくださいね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2226s/>

---

LEXRAD

2011年4月4日22時25分発行